の男顯信）の御出家は、親達が御榮花の花の咲きそめ、御運の登り坂といふ望み盛りの時節を見捨てられたので、實に〳〵類ひのない、同時に悲しいことでした。疾くから其の御志があつてより〳〵に御用意があつたのでせうか、正月の十四日に、御兄弟達に伴はれて、比叡の根本中堂に登られましたが、更に勤行の御樣子もなく、そのまゝお寢みになつたので、御兄弟達が、

「もう曉のお勤めの時刻だのに、どうして寢んではいらッしやる。早く起きて御念誦をなさいよ。」

と云はれると、

「その中、一遍にやりますわ。」

と云はれました。その折には誰れも別にお氣に留められませんでしたが、後になつて、あの頃から、もう出家生活を豫想して居られたのかと、折々思ひ出してはお話し合ひになつたと申します。と云うて別に、人に怪しまれさうな悲觀憂鬱の容子を見せられるのでもなく、人一倍、意氣揚々として快活な人柄でいらしたのでした。

この九條殿は「百鬼夜行」の鬼行列にも逢はれたといひます。いつ時分といふことは、確かに聞くことが出來ませんでしたが、何でも大分夜更けて、御所から退出される時に、大宮から南を指して行かれると、あはのの辻のあたりで、突然御車の簾を下げさせなすつて、

「牛も離せ、早く〳〵！」

と仰しやるので、變だとは思ひながら、御車から牛をはづしたのであつた。隨身や前驅等が何事が起こつたのかと、御車近く駈け寄ると、內側の帛の下簾をも、立派に引きおろして、御笏を取つて俯伏して居られるところが、唯だもう貴人の前に畏つて居られるやうである。そして

「車を榻にかけてはならぬぞ。たゞ隨身どもは、轅の左右、軛の近くに寄り副つて、聲高に先を追へ。雜色等も聲を絕やすな、前驅どもも近くに居れ。」

と仰しやつて、一心不亂に尊勝陀羅尼を御讀誦になりました。牛は車の後の方に引立てさせられました。

さて半時だかり經つて、やう〳〵簾を上げさせられて、

「ちうよい、牛を繋いで進め。」

と仰しやつたが、仔細はお供の誰れ彼れも知らないのであつた。時過ぎて、實はしかゞ、鬼の行列に出會はして、などと、然るべき人々にだけ、御内證に打明けられたらしいが、かういふ珍しい話は自然に廣まるもので、つい世間の語草になつたのでせう。

元方ノ民部卿の御孫君、廣平親王が、まだ儲君でいらッしやつた頃のこと、帝（村上天皇）が庚申待をお催し遊ばされた。かの民部卿の參られたことは申すに及ばず、九條殿も伺はれ、その他の人々も澤山揃はれて、雙六の采振をして遊ばれた。それは丁度冷泉院が安子女御の御腹に孕まれていらつしやる時分で、こんな事が無くつてさへ、世間が「どうだらう。もし男御子が御生れだと、事だぜ」など思つてゐたところへ、九條殿が

「どれ一つ、今夜の双六を仕らうか。」

‖「今宵の」は「今夜第一の」「今夜の中心興味となるべき大事な意義のある」といふやうな

特別の意味を含めた句であらう‖と云はれると同時に、

「今御懷姙中の皇子が、もし男でいらつしやるならば、重六出て來い。」

と云つて振られると、出るも出る、たッた一度に六の目二つが、ちやんと並んで出る、なんといふことがあるものかね‖ところが、それがちやんと出たのだ。ありあふ人々、悉く目を見あはせて、いやどうもと、珍しがつて持て囃す、殿自身も「これはえらい！」と思はれたが、同時にあの民部卿の容子がさッと變はつて眞青になられたといひますよ。そして後日幽靈に出られて、

「あの晩は、見ると同時に、ぎッくりと胸に釘打たれる思ひがした。」

と云はれたといふことです。

大體、この九條殿は、どうも凡人ではいらッしやらなかつたのでせう。將來に望みを繋けられた事で、遂げられなかつた事がありませんでしたよ。唯だ殘念であつたのは、まだお若かつた時分に、

「麻呂は朱雀門の前で、左右の足を西東の大宮通りに蹈張つて、北向きになつて、内裏を抱へて立つてゐる、といふ夢を見たよ。」

とお話しなさると、丁度お前にゐた小賢しい女房が、

「さぞ御股がお痛かつたでせうね。」

と申したので、折角の御夢が逸れて、御子孫はあのやうに榮えられたが、御自身は到頭攝政關白も遊ばさずにしまはれました。また御子孫にも意外の事が交り〳〵して、御曾孫伊周の帥殿配流の事なども、お夢が逸れた爲めと見えます。「えらい吉夢も、わるく合はせると逸れる」と、これは昔から言ひ傳へて居ることですからね。物知らずの前で、うッかり、夢語りなどを、ねい皆様、遊ばすものではありません。こんな意外の逸れもありましたが、とにかく、今後將來とても、九條殿の御一族ばかりがます〳〵御繁昌になることでせう。

痛快であつたのは、かやうに貴い御身柄の九條殿が、貫之大人の家を訪ねられたことでした

よ。これによつて、やッぱり和歌はさすがに偉いものだと感じたのです。それは或る年の正月の一日のこと、是れから參内の御支度といふのに、裝束につけられる魚袋が損じてあるのを見出だされました。それからそれを修繕させらるゝ間に、まづ御父君の貞信公（忠平）を訪ねられて、しか〳〵の次第で參内が遲刻するとお話しなさると、驚かれて、年來御愛用の魚袋を取り出して、そのまゝ肖り物にもと云つて進上され、それをば儀式正しく松の枝に附けられたのでありました。之れに對する恐悅感謝の情を詠み出でる事は、御自身に叶はぬでもなかつたのでせうが、これはやはり貫之に賴まうと思召しての御訪問であつたのです。この意外な名譽の訪問を待ちつけられた名歌人の面目、並大抵であるべき筈がありません。その歌は

吹く風に氷とけたる池の魚は
千代まで松のかげにかくれむ

＝賜はつた魚袋の魚が、綠の松の葉かげに隱れて見えるやうに、春風の吹きそむる正月の元日

早々、御惠みによつて滯りなく魚袋の禮裝を整へ得た私は、これから遠く長く大老松、お父樣の御庇護を蒙ることで御座いませうよ＝といふので、貫之ぬしが名譽として家集に取り入れたのも、尤もの事ですわね。

この通り古往今來かけて申分の無い御身の上であつた九條殿に取つて、唯だ冷泉院の御容子ばかりは、實に情ない殘念なことでした。

と世繼が言ふと、青侍が、

「しかし何かといふと、すぐその御時代が引かれるではありませんか。」

「それは、さうなくてはならぬ筈ですわな。その帝が御生れになつたればこそ、あの藤原氏の御方々が、永久に今以て榮えていらッしやるのですよ。だから

「もしさうでなかつた日にあ、自分なども、昨日今日、せい〳〵諸大夫程度に出世して、攝家、大臣家の前驅などに駈けずり廻つて、へと〳〵になつて居るのさ。」

と、よく入道殿(道長)が戯れて仰しやると、源氏部卿(俊賢)が、

「そのやうな大臣格好をした諸大夫が、御前驅によち〳〵して居たら、さぞ見苦しいことでせうね。」

と承けては笑はれたものです。公私につけて、冷泉院の御代の事を引かれるのは、當然の事ではありませんか。

冷泉院と申せば、憑物が執念深く御着きして離れないので、御一代御一度の御盛儀にどうだらうかと、人々が心配して居られると、あの御大切な大嘗會の御禊の御儀に於いて、實に御立派に堂々と行幸遊ばされましたよ。不思議に思つて見ると、御亡くなりになつた九條殿がですね、立派に人目に見えて、帝を後から御抱へ申上げて、御輿の内に御つきして居られてあつた、と人が話して居りました。いかさま生前にも凡人とは御見えにならなかつたから、御薨去の後などは、尙更影身に副うて御守りなさつたことでせう。」といふと、青侍が、

「もし〳〵、それなら、元方の民部卿や桓算供奉の祟りだッて、追拂ひなさりさうなもので

すがな。」

「それはまた、如何ともし難い前世の約束であつたでせうさ。しかし御心持は實に御立派で、天下の政事も立派に御執り行ひになつたものですから、世間一般、この殿の早い御薨去をば、特に惜しい事に申し合つたことと思ひますね。

扨そこで九條殿の御子達の數は、冷泉院、圓融院の御母后（安子）、貞觀殿の內侍のかみ（登子）、一條の攝政（伊）、堀川の關白（兼通）、大入道殿（兼家）、忠君の兵衞ノ督と、この六人は武藏ノ守從五位ノ上藤原經邦の女（盛子）の腹でした。世間で「子を生まば女子を」といふのは此の事です。また御腹は違ふが、此の殿の男の公達五人（伊尹、兼通、兼家、爲光、公季）は太政大臣に、三人（伊尹、兼通、兼家）はまた攝政になられました。

一　太政大臣伊尹

この大臣をば、世間では一條ノ攝政と申しました。これは九條殿の長男でいらせられます。立派な歌集を作つて、それに『豐景』の題名を與へられました。大臣になり榮えられて、やつと三年目、天祿三年の十一月一日にお薨れになりました。御年四十九。御諱を謙德公と申します。こんなに若くて亡くなられたのは、父君九條殿の御遺誡に背かれた其の報いだと、世間では申して居ります。しかし、どうして、さうなさらぬわけに行くものですかね。それは、九條殿が御自分の御葬儀に關する御希望を、ひどく略式に書き殘しておかれたので、如何にしてもさう迄は…と云ふので、御身分並に行はれた爲めといふではありませんか。それならば、道理至極の爲され方でせうよ。つまり、御容貌といひ、御才能と申し、すべてが餘りに優れて居られたので、御壽命の方に申分が出來たといふわけなのであらうと思はれます。

折々に詠まれた和歌などこそ、實に結構なものでしたね。春日祭の御使に立たれて、その歸るさに、女の許に遣はされたといふのは、

暮ればとく行きて語らむ逢ふことは
とをちの里の住みうかりしも

＝暮れたら早速お訪ねしてお物語をしませうよ、君のいまさぬ遠い十市の奈良住居の間に於ける、わびしかつた事の數々をも＝之れに對して、女からの返歌は、

逢ふことはとをちの里に程へしも
よし野の山とおもふなりけむ

＝御本心は、わたくしに逢ふことの遠のく十市の里に、長い日數を過ぐされたのも、吉野の山の此の方が勝手よしと思はれたからなのでせう。

助信の少將が宇佐の八幡宮へ勅使として下向された時に、清涼殿の殿上の間で、「菊の花のうつろひたる」といふ題で、別かれを惜しむ歌を詠まれました。

さは遠くうつろひぬとかきくの花
をりて見るだにあかぬこゝろを

＝ではいよ〳〵遠い旅路につかれるのですか、近く居りあはせて始終御目に懸かつてゐてさへ飽き足ることを知らぬ心地するものを、色變ふ菊の花の前で、所變り行く君を送るのは、堪へがたく思ひます。

帝（圓融天皇）の御伯父君、東宮（花山）の御祖父君で、攝政まで御勤めになつたのですから、世の中の事、すべて御心通りにならぬはなく、從つて殊の外奢侈を好まれました。在大臣の大振舞をされた時に、寢殿の裏板の壁が少し黑くなつてゐるのを、間際に御見つけになつて、早

速檀紙を一面に貼らせられましたが、それが却つて眞白で、さッぱりして面白かつたと申します。一寸思ひつける事ではありませんわね。その御住居が卽ち今のあの世尊寺なのです。その後御一族の氏寺にして置かれたのを、今日のやうな說敎のお催しのあつた折に、立ち入つて見ましたが、貼られた紙がまだそのまゝになつて居りましてね、昔に立ち返つた心地がして、感慨深く拜見をしたのでありました。此の通りの御榮花を見殘して、まだ五十歲にもならずに御亡くなりになつたこと、殘り惜しさは、父大臣（師輔）にも劣らぬと云つて、世間が惜しみ申したのでありましたよ。

その御子達は男女共に數多居られました。女君の一人は懷子と申し、冷泉院の女御、花山院の御母君で、後に贈皇后ノ宮となられました。次ぎ〳〵の女君二人は、二人とも法住寺の大臣（爲光）の北の方となつて、引きつゞいて亡くなられました。第九の女君は冷泉院の皇子彈正ノ宮の北の方となられましたが、宮御他界の後は尼となつて御殊勝に佛に事へて居られます。ま

た初めに忠君の兵衞ノ督の北の方となられ、後に六條の左大臣（重信）の御子の左大辨道方の北の方となられたお一方がありまして、それはたしか四の君と云はれたと承つて居ります。また花山院の御妹の女一ノ宮（宗子）――卽ち大臣の女懷子のお腹の姫宮――は亡くなられました。女二ノ宮（尊子）は圓融院の御代の齋院に立たせられて天延三年に下りさせられ、天元三年には圓融院の女御として入內されました。そして入內される早々內裏炎上の御不幸があつて、世間が口さがなく火の宮と御つけ申しましたが、さて二三度參內されただけで間もなくお亡くなりになりました。名高い三寶の繪は、此の宮の御覽に入れる爲めに作られたものであります。

男君達は代明親王の御女（惠子）の御腹に、前少將（舉賢）後少將（義孝）と云つて、花やかな兄弟の君達が居られましたが、父の殿が亡くなられてから三年ばかり後、天延二年に疱瘡が流行した時に、煩はれて、兄君の前少將は朝に、弟君の後少將は夕方に亡くなられましたよ。一日の中に二人の愛子を喪はれたお母樣北の方の御心地は、どんなであつたでせう。後少將の方は

名を義孝と云はれました。容貌が非常に端麗で、幼い時から厚く佛法を信じて居られました。病氣の重るまゝに、とても回復が覺束ないと思はれて、母君に言はれました。

「わたくし縡切れましても、どうぞ普通の作法を行はずにおいて下さい。法華經の誦み殘りを誦み上げたいと思ふ本願がありますので、暫らくして必ず歸つてまゐりまする。」

丁度「方便品」を讀みかけて亡くなられたのです。この折角の遺言を、母君がお忘れになる筈はありませんが、前後不覺に泣き悲しんで居られたので、多分、その間に他の人々が取り運んだのでせう。枕を北向きに直すことや、その他何やかやと、すつかり例の作法通りにして了つたので、つひ歸るにも歸へられなくなつてしまはれたのでした。少將はその後母君の御夢にあらはれて、

しかばかり契りしものをわたり川
歸るほどにはわするべしやは

＝あれほど願つて御約束したものを、三途の川から歸つて來るその間に、忘れて下さるとはお情ないではありませんか＝と詠まれたと申します。どんなに悔しく思召したことでせう。

その後また程經て、賀緣阿闍梨と申す坊さんの夢に、この君達が二人揃つて居られたが、兄君の前少將は、ひどく悒鬱いで居られる容子に見え、この後少將の方は大層元氣な容子に見えられたので、阿闍梨が

「あなたは、どうしてさう陽氣にしていらつしやりますか。お母樣は、兄君よりは君をこそ、ひどく追慕して居られますのに。」

と云はれると、甚だ合點のゆかぬ樣子で、

時雨とはちぐさの花ぞ散りまがふ
なにふる里に袖ぬらすらむ

＝わが居る極樂には、無數の美しい花が、時雨の降るやうに散り交うてゐる。わたしは其の間

に無憂の純樂を享けてゐるのに、どうして故郷の母上が悲みの涙に袖を濡らされることであらう＝なぞと當座に詠み出でられたといふことです。

その後また小野ノ宮實資の大臣の見られた夢では、面白く咲いた花の陰に居られたが、在世中も親しくされた仲なので、大臣が不思議に思つて、

「どうして、こんな處に？　一體どこにいらつしやるので？」

と尋ねられると、

「昔は蓬萊宮裏の月に契りき、今は極樂界中の風に遊ぶなり。」

＝昔の楊貴妃は亡き後に蓬萊仙宮の月のもとで、玄宗皇帝の使の方士に逢つたといふが、今の私は極樂世界で、花の風に吹かれて居りますわ＝と答へられたといふことです。屹度極樂に御生れなすつたのでせう。しかしかやうに夢などを御見せにならずとも、この人の極樂御往生に疑ひはありませんよ。

かやうな御性分であつたので、自然、宮中などでも普通の公達のやうに、女房に親しみかはされることもなく、一寸した戯言一つ言はれることすらありませんでしたが、どういふ折であつたか、細殿の女房の部屋に立ち寄られたので、めつたに無い珍しさに、女房達がお相手をして居ると、そろ〳〵夜半にもならうかと思ふ時分に、立ち退かれました。何處へ行かれるのかと心がかりで、あとから人を尾行させると、北の陣を出られる早々から、法華の御經を尊い御聲で朗々と誦み出され、大宮通りを上つて、世尊寺に着かれました。尚も見てゐると、東の對の屋の軒先に、美しい紅梅が今を盛りに咲いて居る、その下に立たれて、

滅罪生善　往生極樂

と唱へ〳〵、西に向つて幾度も額づかれたのでありました。やがて使が歸つて、その様子を語ると、聞く人が悉く殊勝さに打たれたと云ひますが、此の老爺もその頃丁度大宮附近に家を持つてゐたものですからね、その御聲に、ふッと目を覺まして、實に尊く拜聽いたしましたよ。それから立ち出でて見申上げると、空は一面に霞んで、月はぼうッと明るい影を見せ、そして經誦む人は、くッきりと白い直衣を召して、紫の指貫を好い加減に括りあげ、はッきりは

しないが、色のある御衣の端がゆだちから美しく重なつて下つて居ります、その御風采ですよ。御顔の色は月に映えて、くッきりと白く見えるでせう。そして鬢の毛並の揃ひが鮮かに見えるではありませんか。それから御影を失はぬやうに、見送り〳〵お供して、今の「滅罪生善」と唱へて額かれた光景も御見上げ申したので、その御殊勝さにはしみ〴〵感にたへたのでありました。お供には、たしか、小さい子供が一人おつきしてゐたやうでしたね。

また殿上人達の散策遊行の催しのあつた時のこと、言ふ迄もなく他の人々は、皆それ〴〵に狩衣裝束の數寄を凝らして揃つて居られたところへ、この少將は大分後れて、白い御衣に香染の狩衣、薄色の指貫、さういふ地味な取合はせに異彩を放つてお見えになりましたが、それが苦心しぬいた人々よりは、却つて遙かに立ち優つて居りました。不斷の事とて、法華經を小聲につぶやきつゝ、飾玉に水精をつけた紫檀の數珠を、袖口に隱すやうにして持つて居られたそのお嗜みこそ、實に風雅に奥床しく御見受けいたしましたよ。大體死ぬまで精進をつゞけようと思ひ立たれたといふことで、これが先づ容易ならぬことですからね。

また〳〵同じ様な事ながら、お偉いと感心して見たり聞いたりしてゐた事は、やつぱり省かずにお話したいので、申上げるのです。此の少將殿は御容貌が非常に立派で、末代までもかういふ人は出られまい、と御見上げしたのでありましたが、雪の大層降つてゐたある日のこと、一條の左大臣殿(雅信)を訪ねられて、お庭先の梅の木に雪の積つたのを手折つて振られると、白いのがはら〳〵と御身に散りかゝりましたが、御直衣の裏が花田色(薄き藍色)でせう。それが雪を點じて鹿の子斑になつたので、一段と容姿を上げられたのは、何とも云はれぬ御風情でした。御兄君の少將(舉賢)も綺麗なお方でした。しかし此の弟君が此の通り餘りに優美で入らしたところから、それに楯をつかれる氣があつたのでせう、少し蠻勇がかッた荒ッぽいところが御見えになりました。

この義孝の少將が、桃園の源中納言保光卿の御女に生ませられた君ですよ、あの、今世間で能書々々と囃して居る、侍從大納言行成卿は。また其の行成卿の男の御子は、今の但馬守實經

尾張ノ權守良經のお二人で、二人共に源ノ泰清三位の女の腹であります。また本妻腹の御男子は少將行經の君、同じ腹の女君は、入道殿(道長)の御子、高松殿(明子)腹なる權中納言殿(長家)の北の方になられたお方で、これは十五歳で亡くなられました。また今の丹波守經賴の北の方になられたのが居られます。外にまた御長女の大姫君が居られるとかいふことです。

この侍從大納言(行成)がまだ備後ノ介と云はれた時に、地下から飛んで、直ぐに藏人頭になられましたよ。實に破格の事ですわな。その頃は、源民部卿殿(俊賢)が職事を勤めて居られましたが、上達部に榮進されたので、一條天皇が、

「後任には誰れがなるべきであらう。」

と問はせられると、

「行成こそ罷成るべき人物に御座りまする。」

「地下の者では、いかゞあらう。」

と仰しやつたので、

「得難き人物に御座りまする。地下の儀など、御遠慮遊ばすには及びませぬ。朝家の御爲めに、萬事につけて、將來長くお役に立つべき者で御座りまする。斯樣の人物を取りわけ御拔擢遊ばさなくては、世の中の爲めになりませぬ。善惡を御辨へ遊ばせばこそ、人も驚命に勵むと申すもの、この際御登用遊ばさぬとあつては、實にお情なさいことで御座りまする。」

と奏聞されました。無論ならるべき道理があるのではありますが、かういふ事情でなられたのでありました。總じて昔は、前の頭の推擧によつて、後の頭が定るといふ慣例であつたのです。さるほどに、今度の頭には我れこそと思つて居られた或人が、いよ〳〵今夜御敍任と聞いて、そのつもりで參內されると、何處の入口も疾つくに締めてある。入つて見ると、見知らぬ人が居るので、

「誰れだ?」

と問はれると、行成卿が丁寧に名乗られました。意外に思つて、

「何の御用で、參内なされた？」

「頭に任じていたゞきましたので、參内いたしたので御座りまする。」

と答へられたので、餘りの驚きに、暫らくは身動きもせず、棒立ちに立つて居られたといふことです。いかさま、思ひがけぬ事ですから、ありさうな事ですわね。行成卿はこの民部卿が推擧された特別の事情を深く思ひしみて居られたので、後に從二位になられた折とか聞きました、民部卿の正三位を越えられましたが、決して上座には着かれませんでした。そして民部卿が出仕される日は、病と申して不參し、一緒に出仕された日には、差向ひの座席などに居られました。その中に、民部卿が三位になられた折に、やつと、もとのやうに下の位になつて此の御心配がなくなつたのでした。

總じて行成卿の御一家は、藏人頭の競爭について代々相傳の仇を持つて居られるのですから、此の卿も果たして御無事に濟むであらうかと案ぜられますよ。それは方々皆御存じの事ですが、朝成の中納言と一條の攝政（伊尹）とは、曾て同じ折の殿上人で、中納言は家格こそ劣れ、才學も人望も共に拔群で、もう立派に頭に成るべき順番が來てゐたのでありましたが、同時にこの一條殿もやつぱり立派な當然の資格者でありました。そこで朝成の君が一條殿に申されたには、

「殿は今度頭になられずとも、誰れあつて何とも思ふべきではありません。後々も御心任せで御座います。私は今度はづれると、すつかりみじめな身の上になつてしまふのですが、こゝを思召して、何とか御引き下さるわけにはまゐりますまいか。」

と願はれると、

「こちらも其のつもりで居りました。では、手を引きませう。」

と云はれるのを、うれしい、難有いと思つて居られると、一條殿の御心がどう變はつたのか、何の沙汰にも及ばず、間もなく頭になられたので、中納言はかうまで人を欺瞞らずともと、忌々

しさ腹立たしさから、自然仲違ひの形で過ぐされました。その中に、朝成の君が一條殿の家人に何か無禮の仕打があつたとかで、それを一條殿が含まれて、

「たとひ氣に食はぬと思ふ事があるにせよ、事ある毎に自分等を馬鹿にするとは怪しからん。」

と云つて、ぷり〳〵して居られると聞いて、御詫びかたぐ〳〵辯解もしようと云つて、一條殿を訪ねられました。

身分の卑い者が高位の人を訪問する場合、「こちらへ」と案内されぬ限りは、座敷に上がらずに、下に立つて待つ習慣であるが、頃は六七月の堪らない酷暑の折である。しか〳〵と案内して、今か〳〵と中門に立つて待つて居られるうちに、西日がカン〳〵と照りつけて來る、その暑苦しさ、堪へ難しなどはおろかのこと、目がくらみ心が狂ひさうになつたので、

「さては此の殿、我れを焙り殺す豫定の計畫であつたと見える。無用の訪問をしたわい。」

と思はれた。かういふ場合、悪念の起こるに不思議はない。その中に夜になる。いつまで其の

まゝ居るべきでもないので、笏を力に立たれると、

「ぽッきり！」

と折れる—かッとして、どれ程の呪ひ心を起こされたのであらうか。さて、家に歸られて、

かの一族を永久に絶やしてやる。男の子、女の子が有りは有つても、滿足には榮えさせまい。若し傍に「氣の毒！」などといふ者があらば、其奴にも祟つてやらう。」

と呪ひ誓つて、亡くなられた。といふ、この無念の執着が、そも〳〵一條家代々にたゝる悪靈とはなつたのです。

行成卿は一條攝政の孫の君で、近い御血筋でいらつしやるでせう。だから、尙ほのこと恐ろしいのです。その中に或る夜、入道殿(道長)の御夢に、紫震殿の御後、—あの、參内する人の必ず通るところですよ—あそこに人が立つてゐる。誰れかと見られたが、顏が妻戸の上に隱れてゐて、はッきりしない。不思議に思つて、

「誰れだ？　誰れだ？」

と、何度も問はれると、

「朝成で御座ります。」

と答へたので、夢の中でも怖かつたが、じッと我慢して、

「どうして、こんな處に立つて居られる？」

と尋ねられると、

「頭ノ辨（行成）の參內を待ち受けて居りまする。」

と答へたと見て、目がさめられた。さて、今日は公事のある日だから、行成が早朝に參內するであらう。困つた事であると思はれて、

夢に見た事が氣にかゝります。今日は御所勞といふやうな事で、引籠つて嚴重に御物忌なさるが……何の、參內に及びませうや。委細は御目にかゝつて……

と書いて、大急ぎに送られたが、行き違ひになつて、疾ッくに參內された後であつた。しかし神佛の特別な御加護があつたのであらう、例の道筋ではなく、北の陣から藤壺と後涼殿との間

の狹い路を通つて殿上に參られました。道長公が驚かれて、

「これは怪しからん。急ぎの手紙を上げましたのは、御覽にならなかつたのですか。かういふ夢を見たのです。早くお歸りなさい。」

と云はれると、行成卿は手をハタと打つて、どんな樣子と細かにも尋ねず、また二言とは物も云はずに退出されました。それから懇ろに御祈禱などされて、暫らくは參內もされませんでしたよ。この幽靈屋敷といふのは、三條から北の方、西ノ洞院からは西の方で、一條殿の御一族は、そこには今以て、一寸でも立ち寄らぬことにして居られます。

この行成の大納言殿は萬能具足の人でしたが、和歌の方だけは少し不得手であつたのでせうか。その頃「殿上の歌論議」と呼んで、殿上の間で、公卿達が歌の議論を鬪はすことが流行り出しました。そして斯の道に遊ぶ人々が、どう尋ぬべきか、どう答へべきか、などと、歌の學問以外に仕事がないかの如く熱狂して居る間に、この大納言が一言も口出しをされぬので、

どういふ次第かと怪しんで、某の殿が

「難波津に咲くやこの花冬ごもり……この歌いかに？」

と、論議式に尋ねられると、暫らくは物もいはずに、ひどく思案される風でしたが、

「解し得ず。」

と答へられたので、みんなが吹き出して、座が白けてしまひました。

殿はまた、ほんの一寸した事にも、ひどく念を入れて、巧者に工夫される性質の人でした。後一條天皇がまだ御幼少の時分のこと、人々に

「玩具をおくれよ。」

と仰しやつたので、みんなが、何かな面白いものをと、黄金白銀いろ〳〵と趣向を盡くして、風流な物を差上げましたが、この殿は獨樂に村濃の緒をつけて献上されました。主上が

「變な物ぢやな。何ぢや、これは？」

とお尋ねになつたので

「獨樂つぶりと申しまする。廻はして御覽遊ばしませ。面白いもので御座りまするから。」

と申されました。それから南殿（紫震殿）に御出でになつて、お廻しになると、廣い御殿を隅から隅まで、くる〳〵と廻つてあるくので、悉く御氣に召して、こればかりをお翫びになりました。そして外の献上物は皆仕舞ひ込まれたのでありました。

また殿上の人々が、扇などを調製して奉献したことがありましたが、他の人々は骨に蒔繪し、或は白銀、黄金、沈の香木、紫檀などの骨に象嵌や彫刻を施し、地紙は何とも云へぬ立派な紙に人の普通は知らぬやうな歌や詩や、また歌枕になる六十餘州の名所などを書いては差上げましたが、行成卿は、例の風變はりに、骨の漆だけを綺麗に塗つて、黄色い唐紙にほんのりと下繪を畫いて、表の方には、樂府の文句を立派に楷書に書き、裏には筆を停め〳〵、心を凝らして面白く草書に書いて献上されました。主上は裏表をかへし〳〵幾度も御覽になつて、さて大

切に御手筥に御入れになつて、えらい御寶物と思召しましたが、他の扇は唯だ一寸御覽になつて、面白いなと仰しやる位で止んでしまつたといふことです。獨樂といひ、扇といひ、何でもあれ、帝王の特別な御感に預るなんて、こんな名譽がまたとあるものではありますまい。

うまい秀句を吐かれる人でした。あの賀陽院殿（頼通の本邸）で競馬の催しのあつた日に、合圖の鼓を讃岐前司明理の君が打たれました。一番の鼓は誰れ、二番の鼓は彼れなどといひましたが、その人々の名は記憶して居りません。その後の勝負に、明理の君が、勝つべき方の鼓を、過つて下げて打たれた爲めに負けになつてしまつたので、騎手の隨身が向ッ腹を立てゝ、馬に乘りながら、やがて前司を尻目にかけつゝ、

「あゝあ、災難なこッた。是れ式の事さへ、やり損はれるんだもの。だからこそ、明理行成をと、對にして囃されなすつたのが、一方は上首の大納言で、羽振を利かして居られるのに、腐れ前司の、古國守となつて、鼓まで打ちそこねて……あれ〳〵極りわるげに立つて

居られるわよ。」

と放言するのを、大納言殿が聞かれて、

明理が覽行に行成が醜名か！　明理が出鱈目鼓の御附合に、行成が見つともない官位まで引き出されては、叶はん〳〵。あッはッは。」

と云つて笑はれた。自分の名譽を不名譽呼ばはりして、相手の極りわるさを目立たぬやうにされた、そしてそれを面白い對句にして、美しく現はされた、この溫情と機智とに興じて、これがその時分の語り草になつたのでありましたよ。

また一條攝政殿の御男子に、花山院の伯父君で、院の御代に義懷の中納言と云はれた方があります。あの擧賢、義孝二人の少將達の同母の御兄弟ですよ。院の御代にはえらい御勢力でしたが、その中に帝が御出家遊ばされたので、自分も御後れ申すまいと、すぐに花山寺までお慕ひ申して、中一日を置いて、法師になられました。それから飯室といふ所の寺に、非常に尊く

行ひすまして、つひに亡くなられました。この中納言は、文盲ではありましたが、賢明で事務の才幹があつて、その上故實通で、花山院の御代の御政事は、この中納言と惟成の辨とが、心を協はせて行はれたので、大層結構であつたといはれたものです。

この帝様をば、世間では「内劣りの外目出度」と申上げました。賀茂の臨時の祭の折のこと、帝から、

「冬の祭は、日暮れまでかゝるのがよろしくない。人々辰の時(午前八時)に參集せよ。」

と、宣旨を下されました。人々は「さうは仰しやつても、出御はいづれ巳午の時分(午前十時乃至正午)になるであらうなど思つてゐたが、舞人の君達が裝束を戴きに參内して見ると、帝はもう立派に裝束をつけて御立ちになつていらつしやるので、みんなびッくり致しました。あの入道殿(道長)も、其の折に舞人の一人でいらしたので、此頃になつて、よくその時の思ひ出話をなされます、それを世繼が人傳に承つたのですが、入道殿が言はれたのに、

「わたしは、成程、宣旨の如く、早く始めて、明るい中に大路渡りを濟ますのがよからうと思つてゐると、帝は平生ひどく馬好みでいらッしやるので、舞人の馬を、後涼殿の北の馬道から通らせられて、清涼殿の朝餉の間の前の壺庭に引かせて、そこで舞人をおろして、殿上人どもを乘せては輿に入つて居らせられる。それをすら人々が苦々しいと思つて居ると、終ひには御自身乘らうと遊ばすので、一同當惑し合つてゐると、

天の助けとでもいふのでせうか、入道殿と中納言殿(義懷)とが、ひよッこりそこへ御見えになつたので、帝も御顏を眞赤になされて、困つたと思召す御容子でした。中納言殿もこれはひどいと思はれたが、人々の居る前で御意見を申上げるのも見苦しいので、わざと面白さに釣り込まれたやうな風を裝ひつゝ自ら下襲の尻を挾んで馬に乘られました。あの狹いお壺の庭を、曲折自在に、折りまはし折り廻し面白く乘り收められたので、帝の術なげな御容子も直り、恥ぢさせられた馬の慰みも、これでは惡い事でもなかつたのかと、御安心遊ばして、ひどくおはしやぎになる御容子を見て、中納言は淺ましくも、御氣の毒にも思はれました。又中納言の御容

子が帝と同じ心で善くない事をはやし立てゝお勸め申すとは見えず、忠誠の御本心がよく察せられて同情する人もあつたればこそ、この通り逸話として語り傳へられたのでせう。しかし考へは人様々で、「それにしても自分までが乘るのは餘りだ」といふものもありましたよ。

これば かりではありません、總じてこの帝の變はつた御性質は、御容子には著しく見えずに奥深く潜んでゐたので、殊に一大事であつたのです。だから、源民部卿(俊賢)は、

「冷泉様のお狂ひよりは、花山様のお狂ひの方が、始末がわるい。」

と云はれたので、入道殿(道長)は、これを聞いて、

「ひどい事を言はれる！」

と云はれながら、大層笑はれたのでありました。

この義懐の中納言の御出家は惟成の辨が勸められたのだといふことです。辨は分別のすぐれた人で、

「深い御血縁の主君にお別かれしつゝ、今更縁の無い身で、殿上の交りをつゞけられるのは、見苦しいでせう。」

と忠言を試みられたのを、「いかさま、その通り」と、一層深く考へて出家されたのでありました。それで、本來我が心から起こされた道心ではないので、將來を危ぶんだ人もありましたが、根本の御性質が、落ちついて、しつかりして居られたので、怠らず不退轉の修行をつゞけて、立派に往生を遂げられたのでありました。その御子息達は今の飯室の尋圓僧都、それから延圓阿闍梨、入道中將成房の君の三人で、共に備中守爲雅が女の腹です。その成房の中將の御女は大江定經ぬしの奥方でせう。一條殿(伊尹)の御一家は、どういふわけか、御命が短くいらつしやいますね。

花山院は本來出家の御望みがあつただけに、立派に勸行遊ばされて、靈佛靈社で御めぐりにならぬ所が無い位でありました。さる程に、熊野御參詣の途中に千里の濱といふ所がある、そ

こで御氣分の違例を御感じになつたので、沙濱の面に石の出てゐるのを枕にして、御寢みになりましたが、すぐ目の前に海人の鹽燒く煙の心細く立ち昇るのを御覽になる御わびしさ、まあどんなに御身にしみて御感じになつたことでせう。

旅のそら夜半のけぶりとのぼりなば
あまのもしほ火たくかとや見む

＝旅のなかばに、こんな所ではかなくなり、荼毘一片の煙となつて立ちのぼることもあらば、人は千里の濱の蜃どもが鹽火を燒くのかと見るでもあらう。誰れか一人萬乘の果ての我が身の最後と見ようぞ。＝これがその時の御口ずさみでありました。

その中に非凡な御法力もお附きになつて、丁度熊野の中堂に御通夜を遊ばした晩のことである。傍らの僧達が法力の驗競べをしてゐるのを御覽になつて、御自身の驗をも試さうと思召して、御心中に護法善神を念じて入らつしやると、その護法神の憑いた一人の法師が、忽ち御座

所を隔てた御屏風の外側にぴッたりと引きつけられて、一寸も動けなくなりました。そして、「餘り長くなるから、もう許さう」と思召して縛をお解きになると、その途端に、吸ひつけられてゐた法師が、彼れを取り戻さうとして頻りに祈つてゐた仲間の法師の間に躍り込んで歸つて來たので、扨は最前のは院の御祈念に働いた護法善神が引き取つたのであつたかと、人々いづれも院の非凡な御法力に舌を捲いたといふことです。それはさういふわけですわね。法力も人の位によることですから、いかに偉い修行者だからと云つて、どうして院と比較されませう。院には畏れ多くも、前世の戒行によつて、九五の御位に卽かせられた上に、又その王位を捨てさせられた出家の御功德が御ありなのですからね。實に上も限りもないとは此の御事でせうよ。またそれほどの驗を積ませられた御心には、將來かけて御退轉などのあるべき筈がありませんわね。それにつけても、正路をはづれた、をかしな御氣分になり〳〵遊ばされたのも、唯だ憑物の仕業に過ぎなかつたやうに思はれます。

その御狂態の中でも、冷泉院が南の院に在して火災に逢はせられた晩に、御見舞に伺はせられました、其の時の御容子の變なことと云つたら、ありませんでしたよ。御父様の上皇（冷泉天皇）は、御車に召して、二條の町尻に立つて入らつしやるんでせう。御子様の此の院（花山天皇）は、御馬に召して、頂に鏡を嵌めた笠を阿彌陀に冠つて、

「何處に入らつしやる？　どこに、何處に？」

と云つて、御自身逢ふ人毎に御尋ね遊ばすんでせう。そして到頭御座所近くに下馬遊ばされると、御馬の鞭を小腋にかい込んで、御父様の院の御車の前に、御袖を搔き合はせて、何やらに似つかはしうとても神妙にして御出でになりましたわ。（恐れながら、まるで御隨身か別當のやうではありませんか）そんな事ッて、あるものですかね。それに又御子様が御子様なれば、御父様の冷泉院様もまた冷泉院様で、御車の中から、「庭燎」の神樂歌を

みやまには〳〵霰ふるらし外山なる
まさきのかづら色づきにけり色づきにけり

と、高らかに御謠ひになるのですからね。いや、いろ〳〵と面白い事を見たり聞いたりすることだと思つて居ると、明順ぬし（高階）が、

「いや、庭びがとても猛烈だぜ。」

と卽妙の洒落を飛ばされたので、萬人悚へかねて一度にどッと笑はれたのでありました。

それから、もう一つ、花山院が或年賀茂の祭の還立を御覽になつた時の御容子は、各位どなたも御見上げ申上げられたことでせうね。丁度昨日椿事を仕出來させられた今日の事です。さういふ事のあつた場合、今日は尙のこと、晴れの御外出などは御控へ遊ばすべきだのに、名取の異形な從類ども、高帽子の頼勢法師を始めとして、御車の尻に、群をなしてお供した樣子の仰々しさは、申すまでもありません。何よりも人目を惹いたのは御數珠でしたよ。それは小さい蜜柑を普通の珠に貫いて、母珠には大蜜柑を用ゐた御數珠で、それをば長々と、御指貫と揃へて簾の外に御出しになりました。こんな珍らしい見物ッて、あるものですかね。しかも人々

が紫野で、その御車を見て目を離さずに居ると、そこへ檢非違使がやつて來て、昨日の椿事の下手人共を捕へるといふ騷ぎが突發したといふわけです。こんな事といふが、まあるものでせうかね。これは只今の權大納言殿、行成卿がまだお若かつた頃のことでしたが、卿が人を走らせて、

「かやう〳〵の手筈と承りました。大急ぎに御還り遊ばしませ。」

と、御注意申上げたので、お側に群れゐた取卷どもが、蜘蛛の子を大風の吹き散らすやうに逃げてしまつたので、院は唯だ御車副だけに車を御させて、數多の物見車の立ち込む後ろから、隱れ〳〵に御還りになりましたのは、しかしながらお氣の毒でもあり、畏れ多くも感じたのでありましたよ。かくして檢非違使附きの役人などから、ひどく油を御取られなすつて、太上天皇の尊い御名をば永久に御汚しなすつたのです。これを見ると、民部卿殿（俊賢）の言はれたことも、成程と頷かれます。

しかしながら院の遊ばした御歌は、どれ一つとして、人に愛誦されぬはなく、風情のゆたかなものとなつて居りますよ。

こゝろみにほかの月をも見てしがな
わが宿からのあはれなるかと

＝月を見れば哀れが身にしみて感ぜられる。それは我が宿が哀れなる爲めの心うつりであらうか。それとも月その物の與へる感じか。一つたためしに餘所の月を眺めて見たいものである＝などは、とてもあの變態な御心持から御考へつきになるべき事とは思はれません。かう思ふと、實に御氣の毒に堪へないことです。さて又冷泉院に筍を御獻上になつた折には

世の中にふるかひもなき竹の子は、
わが經む年をたてまつるなり

＝生き甲斐もなき君の子たるわたくし、はかなき一植物の竹の子にもなずらふべきわたくしはせめて呉竹の幾千代など祝はれる、竹の子の今後の年齢を献上したいと思ふので御座います＝と詠んで奉られましたが、之れに對して御父院の御返しは、

年へぬる竹のよはひはかへしても
この世を長くなさむとぞおもふ

＝竹といへばわたしも同じ竹だが、わたしは今までとつた老いた親竹の齢は返しても、子の齢を長く久しくしたいと思ひます＝よといふのでした。そして御子様の院の御歌集に「ありがたくも仰せられた」と御記しになつてゐるのは哀れではありませんか。ほんとにあの非常態の御心々にも、お互の長壽を祈らうと思召したのでせう。お痛はしいことですね。

この花山院は風流な意匠家でいらつしやいました。御所をお造りになりました、その御設計で

ですよ。寢殿、對の屋、渡殿などを一緒に造りあはせるのも、檜皮の屋根を一しよに葺き合はせるとも、皆この院の御創案なのです。昔はこれらが皆別々で、間に樋を掛けたものでした。内裏は今以てその通りになつて居るんでせう。また御車宿は、板敷を、奥は高く、手前の端を低くして、そして妻戸を大きく造られました。その故は、御車をば、すぐに乘れるやうに支度したまゝ立てゝおいて、いざといふ場合に、一寸戸を開けさへすれば、手をかけるまでもなく、から〳〵と音がして出て來るやうにといふのですが、面白くも御考案になつたものですね。

お手廻りの御道具などの御綺麗さは、何とも云はれませんでしたね。六ノ宮様(清仁親王)が御氣絶遊ばした時の御讀經の御布施になすつた御硯箱を拜見したことがありますがね。海づくしの地模様に蓬萊山、手長、足長などを金蒔繪にさせられた雅致と申したら、こんな些細な箱でも、漆のつけぶり、蒔繪の樣子、蓋と身の喰ひ合はせの緣の工合など、實に何とも云はれぬものでしたよ。

また木立の按排を遊ばした折には、櫻は、花は優美だが、枝のさし工合がぎくしやくして風

情がなく、幹の格好もわるし、これは枝先ばかりを見るに限ると仰しやつて、中門の外にお植ゑになりましたが、何といふ好い御思附きだらうと、人々が感じ上げたのでありました。また撫子の種を築地の上にお蒔かせになりましたが、季節になると、御所の四方に連綿と唐錦を引き懸けたやうに咲きつゞいたのを、見ましたのは、何といふ風情であつたでせう。

入道殿(道長)が御邸で競馬の催しをされた時に、院をお招き申されましたが、渡御の日の御裝ひの御立派さは申すまでもなく、並大抵のものではありませんが、中でも御車の様子が世間無類のものでありました。御沓に至るまでが、一々人の目を娛しませる類ひのものばかりで、後にはそれを轉々と持ちまはつて愛で囃したと承り及びましたよ。

最後に、繪も御畫きになりましたが、それはとても面白いものでしたよ。例へば、疾走中の車などは、輪を薄墨でぼかして見せて、大きさを示す見當の印に一寸墨を御あしらひになりました。成るほど、かうこそ書くべきわけで、飛ぶやうに走る車が、黑々とした正しい輪廓の輪

を見せた例がありませんからね。また男が筍の皮を指毎に嵌めて、その長い尖つた指で下瞼を引張つて目赤講をして子供を威すと、子供が泣面をして怖がる様子、また金持、貧乏人の家の中の行儀應對の様子などを御畫きになりましたが、どれも〳〵いかさま斯うもあらうと驚かされたのでした。各々の中には、御覽になつたお方も御ありのことと存じます。

一　太政大臣兼通

この大臣は九條殿(師輔)の二郎君で、世間では、堀川の關白と申上げました。關白を遊ばされたことが六年、それまでの御經歷のあらましは、安和二年正月七日、參議になられました。そしてその年の閏五月の二十一日に宮內卿となられたでせう。天祿二年閏二月の二十九日に中納言になられ、大納言は經ずに、十一月廿七日を以て內大臣になられました。實に結構な御榮進振でしたよ。その間、弟の東三條殿(兼家)が中納言になられたのに、兄君の此の殿が、まだ參議で、ひどくつらい事に思はれましたが、やがてかうなられたのはお目出度いことでした。天延二年正月七日に、從二位となられました。二月二十八日に太政大臣になられました。やがて正二位に陞らせられ、輦車の宮中御出入を許されて、三月二十六日には關白になられたといふ次第です。參議になられた年から六年目に、かうはなられたのです。天延三年正月に一位と

なられました。貞元二年十一月八日に亡くなられました、御年五十三。同じ月の二十日に贈正一位の宣旨があり、薨去後の御諡を忠義公と申しました。

かやうに申分なき御出世ぶりの中に、唯だ一つ殘念であつたのは、關官がなかつた爲めに、つい近衞大將に成られることが出來なかつたことでした。しかしそれも畢竟、かやうにとんとん拍子に最上位を極められる爲めであつたので、さうあつて然るべき當然の事であつたのです。そこは唯だ御推量に任せます。お母君の事は傳はりませんが、多分兄君一條殿(伊尹)と同じなのでせう。

圓融院の御母后(村上天皇の后安子)は此の殿の御妹君にいらせられます。この皇后ははやく村上天皇の康保元年四月二十九日に御薨れになりましたが、この皇后のまだ御在世中に、この大臣が、どういふ思召であつたのでせうか、

「關白は順序通りに御任じなさい。」

と、帝あてにお書かせ申して、手に入れられた御書付を、お守札のやうに、大事に首にかけて久しく持つて居られました。さて御弟の東三條殿(兼家)は冷泉院の御代に、已に藏人頭となつて、兄の此の殿よりは先に三位に叙せられて、官も已に中納言になつて居られましたのに、此の殿はやうやう參議ぐらゐであつたので、世の中を悲觀して、參内もめつたにされず、從つて主上も何となく疎遠に思召されたのでありました。かういふ事情の下にあつた天祿三年十月に兄君の一條攝政が亡くなられたのです。殿は早速例の御書付を持つて參内されました。さて叡覽を願はうと思はれると、主上は丁度鬼の間に在らせられたので、好い機會だと思はれると、御伯父と云つても、平生殊に御疎遠にして居る人なので、主上は一目御覽になると、避けて奥へ御入りになりました。殿は追ひすがつて、

「取急ぎ申上げたい事が御座ります。」

と申されると、御戻りになつたので、例の書付を取り出して差上げられました。

受取つて御覽になると、紫の薄様を重ねた紙の面に、亡くなられたお母后の御手で、

「關白は順序の通りに御任じなさい。かりそめにもお違へなさらぬやうに。」

と書かせられてある。御覽になると同時に、深く動かされなすつた御容子で、

「ウム、亡きお母様の御手だな！」

と仰しやつて、御文は御手のまゝで、御入りになつたと云ふやうに、してその結果がこの殿の關白任命とはなつたといふやうに、世間でお噂したものでありますよ。いや、深謀遠慮、實に如在なく考へつかれたもので、無論然るべき前世からの約束事ではありませうが、圓融院が御孝心深くあらせられ、御母宮様の御遺言をあだにすまいとて、その通り御任命遊ばしたとは、何ぼう哀れな事ではありませんか。當時、頼忠の大臣が右大臣でありましたから、道理からいへば此の大臣が關白すべきでありましたが、件のお書付の爲めに、かういふ事にはなつたと、お噂したものであります。當時御弟の東三條殿(兼家)も、堀川殿よりは上位でいらしたのですからね、いや實に巧い事を思ひつかれたものですよ。

この殿が御袴着の御祝に、御祖父君の貞信公へ伺はれました、その折に、貞信公が贈物に添へようとて、貫之ぬしに一首所望されると、差上げられた歌がこれでしたよ。

ことに出でて心のうちに知らるゝは
神のすぢ縄ひけるなりけり

＝琴に寄せ、言葉にあらはしても悦ぶのだが、此の兒を見て深く感ぜられるのは、大祖神天兒屋根命の御血筋を、神の鳥居の注連縄を引くやうに、引き傳へてゐることである。＝引出物に琴を上げられたのでせうね。御容貌は非常に綺麗で、きら〳〵と輝くやうでいらせられました。堀川院にお住ひの頃、正月の二日、臨時の客の日に、酒宴が濟んで、參内されるといふ時に、寢殿の隅の紅梅が今を盛りに咲いて居りました、その花の下に立ち寄つて、一枝手折つて、冠に挿して、ほんの一寸舞を舞はれましたが、その時などは實にお立派に御見えになりましたよ。

この殿には夜明け方に卯の時酒＝卯酒＝を召上がる癖があつて、その御肴には今殺したばかりの雉子の肉を好まれましたが、夜毎に取寄せるわけにも行かないので、宵の中から生きた鳥を用意しておかれるのでありました。高階ノ業遠のぬしが、まだ六位で始めて殿の御殿に勤められた夜のことであります。御沓櫃の脇に居られると、櫃の中で何やらコト〳〵と音がする。はて不思議と、暗いので、しづかに細目に開けて見られると、何と、雉子の雄鳥が屈まつて居るではないか。扨は噂の通りであると、呆れて、人の寢靜まるのを待つて、そうッと櫃から取り出した。それから懷ろに押し込んで、冷泉院のうしろの山に放つてやると、ほろ〳〵と啼きながら飛んで行つたといひましたよ。後に業遠ぬしが、

やり了せた心持は、また格別であつたよ。それでこそ我れは幸福人、放生の慈悲をまんまと仕遂げ得たんだからな。」

と語られたといふことです。生き物殺しは殿原誰れでもやられるが、これは此の上もない無駄な事です。

この殿の御女で、式部卿ノ宮元平親王の御女腹の姫君(媞子)は、圓融院の女御として入内され、天延元年七月十一日に后に立たれて堀川の中宮と申しました。殿はどういふわけか、此の姫君をば、世間普通の親のやうに、可愛がられませんでしたが、一つは姫君が幼いながら非常にお利巧であつた爲めでもありませう、また一つは傍に居る御後見などが御勸めしたのでもありませう、親の愛を得る爲めに、神社佛閣の參詣や御祈禱などを、頻りにされたとかいふことです。稲荷の社の、あの急な坂でも、こゝに居る老妻どもなども御見受けしたと申します。何でもひどくお苦しげで、後押がついて、扇がれ〳〵御參りになつたが、指貫を召した腰のあたりなども、當然の事ながら、やはり周圍の人々には立ち優つて氣高く、立派でいらしてあつたと申しますよ。かやうに神佛まうでの功德を積まれた爲めでせう、追ひ〳〵御成人遊ばさるゝまゝに他に年頃の姫君もいらつしやらず、氣に入らずとも后に立てずにもおかれぬといふので、かくは御入内のお運びとなつて、誠に尊い御身分とはなられたといふ次第です。もう一人の姫君(妍子)これは尙侍になられました。今も御健勝で、六條左大臣殿(重信)の御子の讃岐守の北

の方になつて居られるとか承りました。

御長男は顯光と云はれました。世に堀川の左大臣と申して居ります。長德二年七月二十日に左大臣になられました。御年七十八歳になられた時でせうか、治安元年の五月二十五日に御薨れになりましたよ。もう五年ばかりになつたでせうか。世に「惡靈の左大臣」と言ひ傳へられましてね。氣味のわるい御名ですが、かういふ事には必ず然るべき仔細があることでせう。この大臣の北の方には、村上先帝の女五の宮がならられました。卽ち廣幡の御息所腹の姫君です。此の女五の宮の御腹に男君一人、女君二人居られました。男君は重家の少將と云つて、頭がよく物識で人望もあつて、宮人交際もよくして居られましたが、短命なるべき人なのでせう、出家して早く亡くなられました。姫君の御一人(元子)は一條院に召されて承香殿の女御と稱されましたが、院の御崩れの後、程經て式部卿爲平親王の御子、源宰相賴定の君の北の方となつて、數多の君達を生みつゞけて居られるやうです。その邊の消息は、皆樣よく御存じの事でせうが、その後宰相が亡くなられたので、尼になつて居られます。もうお一方(延子)は、今の小一條院

が、まだ式部卿ノ宮と仰しやつた時分に召されました。そして宮が、東宮に立たれた事を非常に悦ばれて前途に望みを懸けられましたが、宮が院になられてからは、高松殿の御匣殿（寛子、道長の女）の方へのみ通はれて、此の女君へは、唯だ同情をお寄せになるばかり、絶えて通はせられることがなくなつたので、女御も父の顯光大臣も非常に落膽して歎いて居られる中に、御病氣になられたのでせう、去んぬる未の年（寛仁三年）の二月頃に亡くなられました。そのお怨みの積りでせう、恐ろしいものになつて、父の大臣と連れ立つては祟り〳〵して歩かれるのです。殊に目の敵にされるのは院の女御の御匣殿（寛子）で、この人には始終附き纏つて惱ましつづけて居られますよ。その（延子）お腹に宮達が澤山お生れになりました。

また堀川の關白殿（兼通）の御次男は、兵部卿有明親王の御女の腹で、中宮（媞子）と御同母ではありませんでした。このお方は閑院ノ左大將朝光とも呼ばれて、父の大臣の在世の折には、兄君の顯光の大臣が參議をして居られた間、弟の此の殿は引きつゞき中納言を勤めて居られました。兄君の上を越すといふ目出度い御出世振で、世間の人望もすばらしく、容貌も性質も優れて居られました。交際振などは殊に際立つて花やかなものでした。胡籙に盛る箭筈に水晶を附けることも、この殿の思附に始まつたものです。何事の折の行幸であつたか、此の殿も供奉されましたが、例の胡籙を負つて居られると、水晶が朝日にきら〳〵と輝きましてね、あんな結構な見物ッて、あるものではありません。今は目馴れてしまつたので、誰れも珍しく思はなくなつたのです。かう、何事につけても綺羅を飾つた人が、父の大臣が亡くなられると、がッたりと衰へましてね、それに御病氣までが重くなつて、大將も到頭辭してしまはれたのは情ないことでした。それからは大納言だけで、唯だ「藤大納言」と呼ばれなすつたのです。和歌などはなか〳〵立派に遊ばしましたよ。四十五歳で亡くなられました。

北の方には、貞觀殿の尚侍（登子）の御腹なる、重明の式部卿ノ宮の中姫君がおいでになりましたよ。そのお腹に、男君三人と、輝くやうな女君がお生れになりました。この女君は花山院

の御時に入内されて、一月ばかりは特別な御寵愛を受けられましたが、どういふ事情があつたのですか、その中にお召しも無くなり、帝もお訪ねなさらず、御文までがぱッたりと跡を絶つたので、一二ヶ月は辛抱されましたが、到頭居づらくなつて退出されましたよ。こんな人目のわるい事ッて、又とあるものですかね。めつたにない優れた美貌を持ちながら、思ひかけぬ不幸に泣き沈んで居られる女君を、傍で見られる父の大將や兄君達が、まあどんなにおつらかつたことでせう。此の女君と同じ腹の男君三人、その長男の君は今の藤中納言朝經卿でせう。世間から重んぜられて居られるやうです。二男(登朝)三男(相經)の君は右馬ノ頭と少將とで、二人とも出家しては亡くなり亡くなりされました。この右馬ノ頭入道の御男子が今の右京ノ大夫です。

この閑院の大將殿は、後には此の君達の母君をば離別して、枇杷の大納言延光卿が亡くなられて後、その北の方が、年を取つて、容貌なども醜かつた爲めか、別によい評判も無かつたのを、人もあらうに擇りに擇つて、通はれました。そして財産に惹かされなすつたのだと噂さ

れ、その爲めに世間の評判も悪くなられましたよ。本の北の方は容貌も大層美しく、御身分も貴くいらしたのに、不似合だなどと難癖をつけて、しかもこんな新らしい北の方を見つけ出して去られたのですからね。

その新しい北の方の周圍には、腰許三十人ばかりに、裳唐衣を着せて、言葉も及ばぬ盛裝をさせて、ずらりと据ゑ並べて、座敷の飾附を始め、端から端まで手を盡くして、いや其のもてなさるゝこと、もてなさるゝこと！　大將が外出して歸られると、冬ならば火を澤山に埋めて薫物をゆたかに作つて、伏籠を置いて、寢衣をばぼか〳〵として着せて上げられる。炭櫃の爐には銀の提德利を、物の二十も並べて、いろ〳〵な快樂の藥湯を、さしかへ引きかへ薦められる。莫座疊の上敷には、綿を入れて敷かせられる。扨またいよ〳〵寢られる時には、大きな火熨斗を持つた腰許が三四人ばかり出て來て、殿御の御寢るむしろをば、ぼか〳〵と伸して撫でて寢かして上げられる。ちと御取持が念入り過ぎますわね。

かく、座敷夜具などの設備、附きそふ腰許の裝束などは結構づくめでしただけれども、さて

肝腎な御本尊の北の方はといふと、薄黄色い、厚綿の衣二枚ばかりに、白の袴を着けて居られました。年は四十餘歳と見えて、大將と並べると、まるで親のやうに見えました。色が黑くて、額には凸凹の花模樣がついて、それに大切なお髮は縮れて居られました。御容貌の程度をよく自覺して、その容子に相應はしい裝束をと思召して、この黄衣白袴をば選まれたのでせう。いかさま、此の御裝束こそ御容貌にしッくりと合つて見えますわね。但し苟も朝光の大將とも云はれる人の北の方とは、とても見えませんでしたけれども。

前の北の方は、重明の式部卿の宮の姫君で、貞觀殿の尙侍のお腹です。そして貴き素性の人の當然とは申しながら、容貌動作申分なく立派でいらしたのに、こんな人に心を移して離別してしまはれた、その間の消息を考へて見まするに、やッぱり唯だ財産があつて、この通りちやほやされるのに心を惹かれなすつたのだらうと思はれます。

尊い身分の人でも此の通りでした。あゝ〳〵、われ〳〵爺風情の心でも、いかにどえらい寶を降らして取持たうといふ女があらうと、永年の女房を振り捨てゝ「おさらば」をするなんていふ事は、いとしくて出來るものですか。また是れほど尊い生立の人が、いくら不似合だと云つたところで、この老爺どもが宿の妻のやうな事があるものですかぬ。この新しい北の方との關係によつて、世間からも輕く思はれ、人望も落ちて來られたやうですよ。實に情ないことぢやありませんか。大將ともあらう人が、是れほどの事の辨へがつかぬといふことがあるものですかね。下賤の爺どもの心に劣らせられる筈がない、とは思ひますけれども、あんまり情ないと、ぢれッたく思つてゐたことなので、お話するのです。」

と言つて、にこ〳〵する樣子、いかにも極りわるさうである。

「これほどの人でさへ、此の通りであつたのですから、その次ぎ、又その次ぎの人が、どんな不人情をしようと、當前ですわね。これから見ると、この爺らが、長い年頃、見すぼらしい嬶を守つて、味氣ない憂世をじッと我慢してして來たのは、威張れると思ひますよ。」

と云つて、すました顏をしてゐるのは、實に面白かつた。

「大將はその後、時々、もとの北の方をお訪ねなさらうとして、牛飼や車副などに、

「そッちへ車をやれ。」

と命ぜられたけれども、どうしても聞き入れませんでした。これは此の新しい北の方が、大將に附いてゐる侍や、雜色や隨身や、車副などに、衣類その他の品物などを與へるのは云ふに及ばず、毎日酒を出しては飲ませ遊ばせして、特別の志を見せられました、その効目でかうするのを、それにまた腑甲斐ない御心ではありませんか。その牛飼、雜色づれの心に支配されて、到頭行かれなかつたといふのですよ。そんな事といふが、あるものですかね。しかし此の大將は御心持といひ、御容貌といひ、人にすぐれて、實に立派な人でした。

また堀川殿(兼通)の御子、大藏卿正光と云つた人の御女は、源師殿(高明)の御女、中の君のお腹でした。それはもと今の皇太后ノ宮(妍子)の御匣殿となつて居られた方で、今の左兵衞ノ督(公信)の北の方です。その北の方と前の上野國守兼定の君とが、此の同じお腹の御兄弟でした。又つい忘れてゐましたが、堀川殿の御男子はまだ二人居られますよ。一人は北面の中納言と世

間で云つた時光卿で、もう一人は右京の大夫を勤められた遠光卿。この右京の大夫の御子さんですよ、あの仁和寺の別當、律師尋淸の君は。

堀川殿の御子孫は、まづ此の位でせうか。

この兼通の大臣は、萬事につけ非常識で、時々ひどい事をした人でした。御子孫のあれほど連綿と榮えられた弟の東三條殿(兼家)から、理由もなく、官職を取り上げられた位ですからね。何といふ惡い事をされたものでせう。天道樣も屹度怪しからんと思はれたことでせうよ。その折の帝は圓融院で入らせられました。東三條殿は愁訴の心持を長歌に詠んで、奉られましたが、帝は「いなぶね」(古今集なる「最上川のぼればくだるいなぶねのいなにはあらずこの月ばかりの一句)のと御返事があつて、少し待てといふ御内意を御ほのめかしなされたので、暫らくの間不幸な境遇に沈んで居られたのでありました。堀川殿は、また最後には、自分がやがて死ぬるからとて、關白職をば、從弟の頼定の大臣に讓られました。これについて世間では、怪しから

ん不道理の沙汰と惡口したものでしたよ。」

と世繼がいふと、前に居た例の侍が、口を挿んだ。

「いや、私はその東三條殿の官職を奪られた位の事は、別に無理でないやうに聞いて居りますよ。わたしの祖父は長く堀川殿に御仕へして居たので、その事情を委しく聞いて承知して居りますがね。それによると、

御兄弟お二人の仲は、例の官位勝劣の逆事以來、ずッと惡化したまゝでつゞきましたが、その中に兄の殿の御病氣が段々篤しくなつて、今は最期も近づいたといふ時分に、ふと東の方に前を驅ふ聲がいたしました、御側に看護して居る人達が、

「誰れだ？」

「誰れだらう！」

などと云つてゐる中に、

「東三條の大將殿が御入りになりまする。」

と申したのを、殿が聞かれて、

「年來不仲で過ぐして來たが、わしの最期が近いと聞いて、見舞に來てくれたのであらう。」

と言つて、大急ぎに周圍の見苦しい物を取片づけ、御寢所をつくろつて、お迎へする心で、待つて居られると、

「もう素通りなされ、御所の方へ御急ぎになりました。」

と云つた。殿はひどい奴だと、いら〳〵されたが、

「附きそふ者共もさぞ馬鹿らしく思ふであらう。わしは若し見えたらば、關白を讓る相談もしようと思つてゐたのに……あゝ〳〵斯うなればこそ久しく仲違ひをつゞけて來たのだ。怪しからん、どうしてくれよう。」

と云はれたが、絆切れさうにして臥んで居られた人が、

「さあ、かゝへ起こせ！」

と云はれる。人々がびッくりすると、

「車の支度をせい！　供揃をいそげ！」

と疊みかけて仰しやるので、

「憑物がしたのではないか。」

「夢中で云はれるのではないか。」

と怪しみ〳〵見てゐる中に、冠を持て來させて、裝束も立派につけられ、やがて御所へ御參入あつて、陣の内は御子息達の肩に寄り掛り、瀧口の陣の方から帝の御前へと志して、昆明池の御障子の處へ出られましたが、それは丁度晝の御座で、東三條の大將が謁を賜はつて居られる時でした。一體、かの大將殿は、堀川殿がもう亡くなられたと聞かれて、帝に關白後任の事をお願ひ申さう爲めに、兄の殿の門前を素通りして、參内されたのでありましたが、御前に畏つてゐる最中に、堀川殿がくぼんだ目を圓らにして不意に出られたので、帝も大將も、これはとびッくり遊ばされました。大將は見ると同時に、つと立つて隣の鬼の間に避けられました。

さて關白殿は御前に長つて、生きた人とは、とても思はれぬ御顏色で、

「兼通最後の除目を行ひに、參内いたしまして御座りまする。」

と奏聞され、藏人ノ頭を呼んで、關白には賴忠の大臣を任じ、東三條殿からは大將を取上げて、その代はり小一條の濟時の中納言を大將に任ずべき由の宣旨を下し、東三條殿をば治部卿に貶すべき旨を奏聞され、そして退出されると間もなく亡くなられたと申しますよ。さすが意地張の殿とて、もう命終の死期に臨みながら、忌々しさにかッとなつて、參内までして除目の奏聞をされるなど、とても他人の出來る事ではありませんよ。かういふ事情ですから、東三條殿の官職を奪られたのも、あながち堀川殿の亂暴非常識からといふのではありません。

事實の眞相は先づかくの通り。とにかく「關白は順序通りに」といふ書附の趣向を考へつけて、御妹君の皇后ノ宮に書いて貰はれた事といひ、綽切れる間際に、思つただけを仕遂せて亡くなられた事と申し、彼れ是れ考へ合はせると、此の殿はよほど氣の强い、知慧のはたらく人であつたのですね。

一　太政大臣爲光

この大臣は九條殿(師輔)の九男の君で、大臣の位に居らるゝこと七年、世に法住寺の大臣と申しました。正暦三年六月十六日に薨去、御年五十一。薨後の御諱を恒德公と申しました。御子達は男御子が七人、女御子が五人居られました。女君の中二人は佐理の兵部卿の御妹腹で、他の三人は一條の攝政(伊尹)の御女のお腹であります。男君七人の御母はまた皆別々でありました。女君のお一人は花山院の女御となられて御寵愛を專らにされましたが、その中に御子を孕まれて八ヶ月目に亡くなられました。もうお一人は入道義懷中納言の北の方となつて亡くなられました。

御男子の中、太郎君は左衞門督誠信といひましたが、惡心を起こして、三十八歳で亡くなら

れたのは、あさましい事でした。目下の者に官位を越されて辛い目を見るお歴々は、御存じの通り幾らもお有りなのですが、それは皆前世からの約束事と思はれます。誠信君は同じ參議ながら、弟の齊信君とは、人物も世間の評判も大分劣つて居られたのでせうか、丁度中納言に缺員が出來るといふ際に、兄君は是非ともなりたいと考へて、わざ〳〵弟君に對面されました。そして

「今度の中納言は斷念して下さい。私が所望したいと思ふので。」

と申し入れられると、

「どうして兄君の御先に立ちませう。殊に其の仰せを承る以上は、假初にも。」

と答へられたので、すつかり安心して、そのつもりで、頻りに運動されましたが、資格に不足な所があつたのでせう、入道殿(道長)が弟の齊信君を呼んで、

「君には望まれる氣がないのか。」

と尋ねられました。

「兄の左衞門ノ督が望んで居りますから、私はどうも……」

と、しぶ〳〵、望みかねる意中を答へられると、

「いや、あの左衞門ノ督は、とてもなれまい。また君が辭退されるとなれば、他の人がなるであらう。」

と仰しやつたので、

「あの左衞門ノ督が、どの道なれぬとあれば、遠慮に及ばぬこと、では私を御推擧下さい。」

「君が望む以上、どうして他人をば。」

といふやうな事で、到頭弟君がなられましたが、之れを聞いて左衞門ノ督は怒氣心頭、兄に向つて成るまじと誓ひながら、欺瞞るとは何事！　と、むら〳〵と惡心を起こして、敍任の御式のあつたその朝から、兩の手を强く握りしめて、

「おれは、齊信、道長に瞞されてしまつたのだ。」

と思ひ込み、繰り返して、物も食べず、身悶えして俯伏し〳〵される中に、病氣づいて、七日

目といふに亡くなられました。握られた指どもは、恐ろしや餘りの强さに、手の甲に拔け出でたといふことです。

この殿（爲光？）はえらい上戸で入らつしやいました。故の中ノ關白家における或年の正月二日の臨時客に、ひどく醉つて、席に居ながら、立ちもえせず吐かれましたが、それが弘高の書いた名高い樂府の御屏風にかゝつて、さん〴〵に汚されたといふことです。

この中納言になられたのは、今の中宮ノ大夫齊信卿です。これは大層人望のある、立派な人でした。それから、權ノ中將道信の君、これは優れた和歌の上手で、將來を囑望された人でしたが、その中に亡くなつてしまはれました。それから、今の左衞門ノ督公信ノ卿、次ぎに法住寺の僧都尋光の君、阿闍梨良光の君が居られます。おゝ、つい忘れるところでしたが、一條ノ攝政殿（伊尹）の御女腹に第三、四、五の女君が居られます。第三の御方は鷹司殿の北の方でしたが、

今は尼になつて居られます。第四の御方は、今の入道殿(道長)が俗人で居られた時分に、その御子を生んで亡くなられました。第五の君は今の皇后の宮(妍子)に仕へて居られます。

この大臣に關する消息の大體はこの通り。大臣は法住寺を非常に立派に建立されましたが、攝政關白をしなかつた人の事業としては實に豪勢なものですよ。この大臣は、此の通り御自身はまことに貴い身となられましたが、御子孫はお氣の毒に末すぼまりでしてね。

一 太政大臣公季

この大臣は今の「閑院の大臣」で入らつしやいます。九條殿(師輔)の第十一男で、內親王(康子)を母君にもたれ、親王(有明親王)の御女を北の方に持たれました。その北の方のお腹に女君一人、男君二人がありましたが、女君(義子)は一條院に入內された弘徽殿の女御で、今に御存命です。男君の一人は三昧僧都如源と云はれ、これは亡くなられました。今一人の男君は今の右衞門督實成卿でいらつしやいます。此の殿の御子、播磨守陳政の御女の腹に、女君二人、男君一人居られます。大姫君は今の中宮權大夫殿(能信)の北の方、他のお一人は源の大納言俊賢卿、卽ち民部卿と云はれた人の御子息、今の頭中將顯基の北の方でいらッしやるでせう。男君をば御祖父樣の太政大臣殿が、我が子にされて、公成と名づけられました。藏人の頭で、世間の評判の大層よい方でいらつしやいます。

この太政大臣殿の御一家に關する消息は大體右の通り。此の御系統からは、帝も后も立たれませんでした。

この太政大臣殿の御母君は延喜の帝（醍醐天皇）の皇女で「女四の宮」（康子）と申上げました。延喜が大層お可愛がりなさつたものです。御裳着、成女式の紀念の屏風に、源公忠の右大辨が

ゆきやらで山路くらしつほとゝぎす
いま一聲のきかまほしさに

＝山越えする人の時鳥を聽く繪に題した歌、今聽いた時鳥が面白く、もう一聲の聞きたさに、ずん〳〵と得進みかねて、同じ山路を行きつ戻りつしてゐる＝と詠んだのは、此の宮樣の御祝ひでした。此の折に貫之その他の名歌人が數多詠進して居りますが、これは此の人としては、勝れた作だと云つて、ちやほやされたものです。

この宮は朱雀、村上、お二人の帝と同じお腹でいらつしやります。その爲めに宮中に住んで大切に傅育されなすつたものでしたが、それに九條殿が、お附きの女房を介して、こツそりとお通ひになつたのでありましたよ。これをば世間でも不都合な事に噂し、村上天皇も面白からぬ事に御心では思召しましたけれども、あらはにはお咎めもありませんでした。これは畢竟九條殿に對する御信用が此の上もなく厚かつた爲めであります。此の事について、人々が唯だひそ〳〵と耳こすりするばかり、陛下（村上天皇）にもまだ御存知のない中の事でした。恐ろしい雨に、雷までがごろ〳〵ぴか〳〵と鳴りひらく日に、この女宮が丁度宮中に御いでであつたので、帝が、

「殿上の人々、いそいで四ノ宮の方へ參れ。怖がつて居られるであらうに。」

と仰言があり、誰れも〳〵參る中に、唯だ一人、小野ノ宮の大臣（實頼、師輔が腹ちがひの兄）がですよ、

「わしは參るまいよ。御前が穢れてるからね。」

と、獨語のやうにつぶやかれましたが、帝も後日、「あゝその事であつたか」と思ひ合はせなすつた事でせう。

さていよ〳〵宮中を御退下あり、九條殿の北の方となられてから、大事にいつくしまれ取扱はれなすつたことは申すまでもありません。その中に、この太政大臣(公季)が孕まれると、豫感とでもいふものが、ひどく心細く感ぜられて、

「わたしは、とても助からない心持がいたします。まあとにかく、見てゐて下さい。」

と、夫君に對して、口癖のやうに仰しやるので、殿は

「萬一そんな事でもあれば、一寸も後れることではありません。もし思ふに任せずして、生き存へるならば、必ず出家いたしませう。また空を翔つても御覽なさい、二度と他の女人には見えますまいぞ。」

と申されたのでありました。しかし北の方は殿の法師になられる事をば、然るべからざる事と思召されたのでせう、一對の小さい唐櫃の、片方には御烏帽子を、他の片方には御襪を、御自

分で縫つて、すッぽりと入れて置かれたのを、殿はそれとは知られなかつたのでした。その中に到頭亡くなつてしまはれたので、だから、此の公季の大臣は、その誕生の日を、そのまゝ御母宮の御命日となされたといふわけです。九條殿はその縫つて置かれた御烏帽子と御襪とを御覽になる度ごとに、御袖をぬらされぬことがありませんでした。またほんとに、その後を獨身で通ほされたのでした。

この女四の宮のお忘れ遺兒の太政大臣殿をば、御妹君の安子中宮が、本來非常な御一族思ひでいらつしやるので、すぐに引取つて養育されました。それから引きつゞいて宮中にのみ居られ、帝もすつかり祕藏兒にして愛撫していらせられたので、始終帝の御膝許に居られて、何事にも皇子達同樣の待遇を受けられました。皇子達との著しい差別は、恐らく物を召食る時の御臺が少し低かつた位のことでせう。昔は皇子達でも、御幼少の間は、內裏に住ませられることがなかつたものでしたが、此の若君が、かうして帝の御傍に居られるので、世間では、あるま

じき事としてお謗り申上げた位でした。とにかく、かうして御成長なされたので、普通の殿上人などに準ずべきではなく、それにお小さいだけ、御遊戯などの折にも、自然皇子達對等に振舞はれましたが、或る折に、二歳御わかい圓融天皇が、

「同じ身分の弟どもと思つてるのかな。ちつと氣をつければよいのに。」

と仰しやつては、「あゝあ」と御嘆息なすつたものでありました。

その中に御年が積もつて、いつしかお祖父様になられると、今度は御孫の頭ノ中將公成の君を、殊の外に可愛がられて、參内するにも、御車の尻に伴はずには出仕されませんでした。また然るべき公事のあつた場合にも、この君の退出が遲くなると、弓場殿に供揃の用意だけさせておいて、自身は立ちながら待つて居られるので、その前を通る人が、

「どうして、こんな所に立つていらつしやります？」

とお尋ねすると、

「犬を待つて居りますわ。」

と仰しやつたといふことです。（孫の君の幼名を呼ばれたのであらう。）後年無量壽院の金堂の御供養に、東宮（後朱雀天皇）行啓のお供をされたことがありましたが、途中初めから終りまで、

「公成の上をよろしく願ひまする、よろしく願ひまする。」

と、同じ事を言ひつゞけられたので、後に、東宮が、

「可哀相ではあるが、また可笑しくもあつた。」

と仰しやつたといふことであります。これは榮樹が姪の娘が東宮の御乳母の中務の家に勤めてゐる、それが來て、話して聞かせたことでした。

頭ノ中將顯基（公季の孫女の聟）の君の若君（資綱）とかいひましたね。その君の生後五十日目の五十日の御祝を、四條殿にお連れ申して、曾祖父君の太政大臣殿が、祝の餅をお哺ませになりました。御祖父君の右衞門ノ督（實成）が抱いて居られると、その赤ン坊が泣かれるので

「不斷はかうもむづからぬのに、どうして今日は。」

と云つて、立つたり居たりして、あやされると、太政大臣殿が、

「赤ゝ坊は皆さういふものさ。お前もさうだつたよ。」

と云はれた、此の一言に、然るべきお客達が、皆にッこりされたものでした。その中でも四位、少將隆國の君は、始終思ひ出しては、今に笑草にして居られますよ。

大臣はこの通り、ひどく昔風のあどけない所のあつた人でした。むかしの童名を宮雄君と云はれたといふことです。

一　太政大臣兼家

この大臣は九條殿の御三男、謂はゆる東三條の大臣でいらつしやいます。御母は一條攝政（伊尹）と同樣です。冷泉院、圓融院の御伯父君、一條院、三條院の御祖父君、東三條の女院（詮子）、贈皇后宮（超子）の御父君で、公卿で二十年、大臣の位で十二年、そして攝政として天下の政治を取られたことが光榮の五年にわたりました。正曆元年七月二日亡くなられました。御年六十二。出家をされたので、御諡號がありません。

參內されるには無論牛車で、北の陣まで入られると、それから御所までは程もないのに、もう裝束の入紐を解いて、うち寛いで居られたといひますよ。それ位はまだいゝでせうが、七月の相撲の折に、東宮（三條天皇）がいらッしやれば、卽ち陛下、殿下のお揃ひといふわけですが、

そのお二方の御前をも憚らず、一切を脱ぎ去つて、汗取たゞ一枚になつて、お側に居られたといひますからね。まさに天下無類の恐れ多いことではありませんか。後には北の方も居られなかつたので、鰥男暮らしでありながら、東三條殿の西の對を、清涼殿風に造つて、内部の裝飾を始め一切を似せて、住んで居られました。餘りの僭上と世の取沙汰になつたやうです。尙ほ此の大臣について、世間ではあの殿が人臣に生れられたのを見ると、これはやはり御運が足らなかつたのであらうといひ、或はさやうに僭上な身持の報いで、長命が出來なかつたのであらうなどとも批評してゐるらしいやうでした。

その頃は夢解にも、巫女にも、えらいやつがゐたものでしたよ。兄君の堀川の攝政（兼通）が飛ぶ鳥を落された時分、即ちこの東三條殿が丁度官職を取上げられて、ひどく悲觀して居られた時分に、或人の夢に、堀川の院から、夥しい矢が東の方へ射られて行くので、はて不思議と見てゐると、それが悉く東三條に落ちてしまつたと見たのであつた。不快に思つて居られる人

の方角から矢を見舞はれるのだから、悪い事であらうと思つて、殿のお耳にも入れると、怖がられて、夢解に尋ねられると、

「これはえらい吉夢で御座りまする。天下が此の御殿に移つて、あの御殿に仕へてゐた人が、殘らずこちらへ參るべき兆で御座りまする。」

と申したといひますが、圖星ではありませんか。

その頃また評判の巫女が居りました。賀茂の若宮がお憑きなさるといふ評判で、始終俯伏してばかり物を言ふので、世間では「うちふしの巫」と呼んで居りました。大入道殿（兼家）も呼び入れて物を尋ねられたが、ひどくはツきりした事を言ふ。少しえら過ぎるやうだが現在の事も過去の事も的中するから、これも其の通りだらうと思つていらつしやると、果して符節を合はする事が出て來、出て來するので、後には裝束冠と禮裝して敬意を表しつゝ御膝に枕させてはお尋ねになりました。未來の事を、何一つも言ひ違へたことがなかつたと申します。かやうに身近く召し寄せて御覽になると、いふにも足らぬ下司ではなくて、一寸「何々のお許」とも

いふべき侍女程度の者であつたといふことです

この殿が法興院に住まれる事をば、氣味のわるい所と云つて、人々が御同意しませんでした。しかし殿はひどく此の院が御氣に入つて、周圍の諫めを聞き入れずに、行き〳〵されましたが、最後には行かれると間もなく亡くなられたのでしたよ。それは丁度御物忌の折で、御出かけになる前に、あらかじめ「行つては、どうか」と、占はせられたのでありましたが、到頭その法興院で病みつかれ、そして亡くなられたのでした。此の院は、御厩の馬に御隨身を乘せて、粟田口へ遣ると、小さくなるまで、いつまでも見えるのが面白いなぞと仰せられました。明月の夜は、格子を下さずに眺めやるのを例とされましたが、或夜のこと、目に見えぬ者がその格子をばたばたと一氣に下したので、お側の人々が怖ぢ恐れて立ち騷ぐ間に、殿は泰然自若として、御枕許の太刀を拔かれ、

「月を見る爲めに上げてある格子をおろすは何者だ。怪しからん。もと通りに殘らず上げよ。上げずば、爲めになるまいぞ。」

と仰せられると、すぐ又端から端まで、一氣に上げてしまつたといふことで、とにかく腑に落ちぬ事があり〳〵しました。そんなわけで、到頭御子達の御所有ともならず、あの通り佛を齋く御寺とはされたのでせう。

この大臣の御子達は女君が四人、男君が五人居られました。その中、女君二人、男君三人は攝津守藤原中正ぬしの御娘腹であります。それは三條院の御母君の贈皇后宮(超子)と、女院(詮子)と、道隆、道兼、道長の三大臣でいらッしやいますよ。その御母君が、何と考へられたのか、まだ若い時分に、二條の大路に出て、夕卦の辻占を問はれると、白髮の眞白な老女が、唯だ一人やつて來たが、立ち止つて、

「何の御用で御座います。おゝ、辻占のお尋ねで御座いますか。……これはまあ大吉上々、思召す事何でも叶つて、此の大路よりも廣く長くお榮えになりませうぞ。お榮えなされ、

お榮え遊ばせ、大吉の上々さま。」

などと言ひ〳〵、行つてしまひました。これは恐らく人間ではありますまい、然るべき神佛などの示現遊ばしたので御座いませう。

女君のお一人は、女院(詮子)が皇后宮でおはした折の宣旨—立后の宣旨を取次いだ女房—でありました。また對の御方と云はれた人の腹に生れた御女があつて、この人をば大臣が特別に可愛がられて、十一歳の時に、尙侍にして內裏住をさせられました。容子が御可愛ゆく、御髮も、十一二歳ごろに、もう長い絲を撚つて懸けたやうで、非常にお美しかつたので、これならばと、三條院が東宮で御元服遊ばされた夜の御副臥に進められました。東宮も憎からぬものに思召されましたが、夏の極暑の日に、東宮の御前に御いでになると、東宮が御前の氷を御取りになつて、

「少しの間、持つていらッしやい。わたしを思つていらッしやるならば、もうよいと云は

ぬ限り、放してはいけませんよ。」

と仰しやつて、持たせて御覽じていらつしやると、御言葉通りほんとに觸れた跡の黑くなるまで持つて居られました。東宮は御覽じて、

「つめたくとも少しの間は持つてゐるだらうと思つたが、あれでは氣の毒さを通り越して、いやになつて來たよ。」

と仰せられたといふことです。

怪しからんのは、源宰相頼定の君が、此の尙侍に通はれるといふ噂の立つた事で、尙侍が宮中を辭して里に下られたのはその爲めであつたのです。それのみならず懷姙までされたとお聞きになつて、東宮が、尙侍の兄君の入道殿(道長)に

「しか〳〵の噂があるのは眞實であらうか。」

と仰しやつたので、

「出向いて見てまゐりませう。」

と申して、いらッしやると、めつたに來ぬ人が、怪しいと思召して、几帳を引き寄せられたのを、押しのけて見られると、本來のよい縹致が、花やかに化粧されて、一段と美しく見えられました。

「東宮へあがつたところ、かやう〳〵仰しやるので、拜見にまゐつたのです。虚構事でもあらうに、さういふ噂がお耳に入つては、甚だ不都合なことですからね。」

と云つて、御胸を引きあけて、乳をひねられると、御顏にさッと迸りかゝるではありませんか。

殿は何とも仰しやらずに、そのまゝ立たれました。そして東宮へ伺はれて、

「眞實で御座りました。」

と云つて、試みた次第をそのまゝ言上されると、東宮は近頃の寵の衰へを氣の毒に思召されたが折からでもあつた爲めか、憎みながら可哀相と思召されたといふことです。

一方尙侍は兄の殿が歸られて後、自分で求められた事ながら、大層御泣きになつたと、その折に御見受けした人の話でありました。東宮に侍して居られた時分も、宰相の通ひ路が餘りに度かさなつたので、東宮も聞召して、

「帶刀どもに命じて、射させてやらうかとも思つたが、亡くなられた父大臣が、草葉の陰でどう思ふかと考へると、氣の毒になつて、つい見合はせた。」

と仰しやつたといふことです。

この落度によつて、源宰相は三條院の御代の間は昇殿もされず、地下の上達部で、極りわるくして居られましたが、當御代になつて、始めて昇殿を許され、檢非違使の別當などになつた上で亡くなられたのでありました。

もう一人の御腹の長女の君(超子)は、冷泉院の女御で、三條院、彈正ノ宮(爲尊親王)、帥ノ宮(敦道親王)の御母君で、そして三條院が帝位に卽かせられたので、贈皇太后宮と申しました。こ

の三人の宮様達をば、御祖父君の殿が、殊の外に可愛がられました。世の中に一寸した出來事でもあるか、雷でも鳴るか、地震でも搖るかすると、御自身が先づ東宮の御所へ駈けつけられて、伯父の殿方やその他の人々には、

「お前達は御所の方へ行け、東宮へはおれが行つてお附きする。」

と仰せられました。雲形といふ名高い御石帶も此の殿が三條院に獻ぜられたのです。そして其の鉸具の裏には、特に「東宮に獻る」と、御自身、刀の尖で書かれました。その御帶が、此頃は一品宮様(三條院の皇女禎子内親王)に傳はつて居ると承つて居ります。

この東宮の弟宮様達には、少し御輕卒の氣味がありました。帥ノ宮が、賀茂祭の還立を、和泉式部と相乘して御見物なすつた時の御容子などは、とても振つたものでしたよ。御乘車の前の簾を眞中から縱に切つて、御自分の乘られた右の方をば高々と捲き上げさせ、式部が乘つた左の方をばおろして、その下から着物の端を長々と出して、そして式部の着た紅の袴に、赤い色紙を廣く切つて、それに「物忌」と書いたのを、土につく位に下げられたのですからね。道理こ

そ凡ての見物が、還立の行列よりは、その方を見て居りましたよ。

その兄宮の彈正ノ宮が御ちひさい時分の童形姿のお可愛らしさと云つたら、實に言語に絶して、光り輝くやうに御見えになりました。それが御元服なすつて、ひどく髮あげ劣りのなすつたものでしたよ。このお二人が御心持の輕佻でいらッしやる事を、東三條一家の殿原が怪しからん事と思はれましたが、しかし、然るべき大事の折には實に行屆いた御世話振を見せられました。一條院の御代に作詩の御催しがあつて、帥ノ宮が參内された時などは、御前驅に然るべき御歴々が立たれて、實にお立派な御參内振でした。その折に宮が御襪を強く締められた爲め、御前で氣分をわるくなされて、入道殿に、さう仰しやると、殿は隣りの鬼の間に御連れ申して御襪を脱がせて上げられ、それで、やつと御氣分が御直りになつたといふこともありました。

贈皇后ノ宮(超子)と一つ御腹の、もう一人の姫君(諟子)は圓融院の御代に入内され、梅壺の女御と云はれて、そのお腹に第一の皇子が御生れになりました。そしてその皇子が五歳で東宮に

立たせられ、七歳で帝位に卽かせられたので、御母の女御殿が寛和二年の七月五日に、皇太后となられました。この帝が一條院であらせられます。この御母后が後に入道なされて、太上天皇と同じ御位の女院と申上げました。このお方が天が下をわが思ふまゝに遊ばしたので御座いますよ。

この父大臣の太郎の君が女院（詮子）と同じお腹の道隆の大臣で、內大臣で關白を勤められました。次郎の君は陸奥ノ守倫寧ぬしの女の腹に生れられたお方です。道綱と云はれ、大納言までなつて右大將を兼ねられました。その母君といふのが、非常に優れた歌人であつたので、かの東三條殿が自分に通はれた長い間の事をば、歌まじりに書き集めて、「蜻蛉の日記」と題して、世間に弘められました。殿がお訪ねになつた時に、早速門を開けないので、幾度も〳〵案內されると、

なげきつゝ獨りぬる夜のあくるまは
いかに久しきものとかは知る

＝君を待ちかねて歎き〳〵唯だ一人さびしく寢る夜の明けるまでを、どんなに長いものと思召しますか＝と詠まれる。殿は巧い事をいふと思召して、

げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸も
おそく明くるは苦しかりけり

＝その通り〳〵、冬の長夜は無論だが、冬ならぬ夜の門の戸も、おそく明けられるのは苦しいものさ＝そして此の才女のお腹に生れた君ですよ、かの道綱は。後には東宮の御傅役になられ、「傅の殿」とも云はれたやうです。お氣の毒に、段々病氣が重くなつて、遂に大將をも辭退されました。この道綱卿が、今の入道殿（道長）の夫人（倫子）の御妹君に通はれて、生ませられた

のが參議中將兼經の君に道明阿闍梨、この道明阿闍梨は非常にすぐれた歌人でした。父の大納言殿は寛仁四年の十月十三日に出家され、同じく十六日に亡くなられました。御年は六十六と承つて居ります。

大入道殿(兼家)の御三郎は粟田殿。それから四郎は腹ちがひの治部少輔の君と云つて、これは世に知られた癡漢で、世間交際も到頭出來ず終ひであつたと承つて居ります。五郎の君が即ち、只今のあの入道殿(道長)でいらつしやいます。

で、これから女院の御母北の方(時姫)腹の御子息お三人の御傳紀を申し述べませう。昭宣公(基經)の御子息三人(時平、仲平、忠平)を三平と云ひはやしたのにむかへて、此のお三人(道隆、道兼、道長)をば「三道」とでも世間で申したでせうか。惜しいことに、つひ其の稱を聞かずにしまひました。」

と、世繼は遊情の滑稽に得意の微笑を見せた。

一 内大臣道隆

この大臣は東三條ノ大臣の一男、御母は女院と同じお腹です。關白になり榮えて、六年ばかりも居られたでせうか、あの長保元年の疫病大流行の折に亡くなられました。たゞしその流行の病氣のためではなく、亂酒のたゝりで亡くなられたのでした。「男は上戸」など云つて、酒を飲む事を人生の興味の一つにしては居りますが、過ぎるといろ〳〵の不都合を出來すものですね。

或る年、賀茂祭の還立を見物されると云つて、小一條ノ濟時の大將、閑院ノ朝光の大將と、三人同車で紫野に出かけられました。烏のしやがんだ形に、酒瓶を造らせられて、大層愛で興じつゝ、時折それに御酒を入れて召あがりました。其の日もそれで傾けられたが、さて飲む程に、飲む程に、いつしか段々過ぐさせられて、終には車の前後の簾を悉く捲き上げて、三人ながら冠

をぬぎ、髻を露はにして居られたお容子の見苦しさと云つたら、ありませんでした。先づ此の大將達が訪ねられると、普通尋常の容子をして歸られるのを、ひどく不本意に、またつまらなく思はれました。そして前後を忘じて、裝束を取亂して、車を近く寄せて、人に助けられて乘つて歸られるのを、酒興の至上味とはされたのでした。

但し此の殿は、ひどく醉はれる割合には、不思議に早く醒められたものです。關白の賀茂詣の日は、社頭で御土器を三度進めるのを恒例としてありますのを、此の殿の關白時代には、禰宜神主も心得て、特に大土器を進めましたが、それで三度はおろか、七度も八度も重ねられてそれから上の御社に參られる途中では、もう仰向に倒れて、車の後を頭にして、前後不覺に眠つてしまはれたものでした。其の時分、第一座の大納言はあの御堂殿道長公でしたが、よく注意していらつしやると、夜になれば御前驅のともす松火の光で、御車の中が透いて見えるのに殿の透影が見えないので、ハテ變だなと思つていらつしやると、その中に上賀茂の社前に着いた。御車の轅をおろしたが、まだ氣がつかれない。御前驅どもも、困つたとは思ふが、喚びさ

ますことも出來ずに、たゞもぢ〳〵して居るらしい。入道殿(道長)は下りられたが、そのまゝにしておくべきでもないので、轅の外から高やかに「やあ〳〵」と聲をかけては扇を鳴らしなどされるけれども、一向目を覺まされる樣子がない。仕方なく、近く寄つて、大臣の表袴の裾を手强く引張られると、やつと目をさまされたが、扨それからの支度は手に入つたもので、櫛笄は豫め用意して車中にある、それをさツさと取り出して、ちやんと身づくろひして、さて車から降りて立たれると・・・、今まで醉ひたふれてゐた樣子などは微塵もなく、實に端然とすまされたものでありました。一體それ程醉うた人が、その夜すぐに平氣で起きあがるなんといふ事が出來るものですかね。こゝが此の殿の上戸癖のよいところでしたよ。この酒を愛する御心をば、やはり御綷切の間際までも失はれなかつたのでせう。御病氣が重つて、亡くなられるといふ時に、西の方を向かせ申しまして、

「御念佛を遊ばせ。」

と、人々がお勸めすると、

「濟時朝光等の飲み友達が、極樂に居るだらうか。」

と仰しやつたと申しますが、感にたへた事ではありませんか。始終「酒」「酒」と心に沁み込むばかり思つて居られたから、かうも云はれたので、說法でよく聽く、地獄の鼎の蓋に頭をぶッつけて、ふッと佛法僧の尊い御名を思ひ出したといふ人に、よく似て居る話ですね。

御容貌は實に端麗な方でありました。帥殿(伊周)に關白代理の宣旨が下つた時に、あの俊賢の民部卿が頭ノ辨で、それを傳へに殿の邸に來られましたが、御重態の爲め、禮裝も出來ず、略式の直衣姿で御簾の外に膝行して出られましたが、高い長押をやッと下りて、女の裝束を手に取りつゝ、儀式通りに贈られたのは、實に哀れなものであつたといふことです。他の人がもしそれ程の重態になつたら、相貌がすつかり變はるであらうに、やッぱり大層綺麗で上品でいらつしやつたので、

「病氣した時こそ、あゝいふきれいな容貌がほしいものと、つくゞ思つた。」

と、民部卿殿が始終口癖に言はれるのです。

その關白殿は、腹々に男の御子、女の御子を、あまた持たれました。今の北の方は大和ノ守高階ノ成忠ぬしの御女です。後には父の位によつて「高二位」と云はれましたが、積善寺で行はれた故關白の供養の日に、あの入道殿(道長)の上座に着かれたのは、實に珍しいとでしたよ。此の北の方の腹に男君が三人、女君が四人居られました。第一の大姫君(定子)は、一條院が十一歳で御元服遊ばした時に、たしか十五歳で御入內遊ばしたでせう。間もなく其の年の六月一日に、后とお定まりなされて、中宮と申上げました。此の姫君を、父君東三條殿(兼家)御大病の最惡期の過ぎるのも待たずに奉られたのをこそ、世間ではどういふものかと非難したのでありました。扨中宮は、この關白殿(道隆)が亡くなられて後に、親王一人、內親王二人、御產みになりました。その女宮は入道ノ一品ノ宮と申して、三條に居られます。第二の女宮は九つで亡くなられました。男御子は、式部卿ノ宮敦康親王と申しました。第一皇子に生れさせなが

ら御即位も叶はず、お望みが何度も〳〵はづれて世の中を果敢なみつゝ、到頭悲歎の中に御かくれになりましたよ。御年はやう〳〵二十九で、しかも御病身で不如意の御一生をつゞけられたのですからね。もし冷泉院の宮様達のやうに、輕佻浮薄といふやうな事ででもいらつしやれば、同じくお痛はしいと云つても、人が好い加減に思ふのでせうが、御學問が大層御優れて、御性格も實に御立派でいらしたのですからね。

さて此の宮の御母后(定子)のすぐ次ぎの姫君(原子)は、三條院がまだ東宮と仰しやつた時分に淑景舍と云つて御寵愛を受けられましたが、父の殿薨去の後、御年二十二三で亡くなられました。第三の御方は冷泉院の第四皇子敦道親王、帥ノ宮と仰しやつたのを、父の殿の御計らひで、御聟君にされましたが、その後間もなく御緣切れになつて、ずつと後には、一條邊にあさましく零落していらつしやると承りました。本當でせうか、御心持の浮き〳〵したお方で、宮様も一つはその爲めにお嫌ひなさつたのだと申します。坊さんやお客などがお伺ひした場合に、よく御簾を高々と押しあげて、そして御胸をひろげて突立つて御いでになるので、宮様もすつかりお顏を赤くなされたといふことです。またお側に居る人達も、顏から火の出るやうな心地がして、俯伏したまゝ、起つにも起たれず、進退に窮したと申します。宮様も後日になつて、

「目をそらしたまゝ、動くこともならず、何が何やら解らなかつたよ。」

と仰しやつたといふことです。

殿はまた、大學の學生等を召し集めて詩を作つて遊ばれましたが、その折に、黃金二三十兩ばかりを、屏風の上から投げ出して人々に打ちあてられました。人々は此の、場合にそぐはぬ惡戲を、怪しからんとは思つたけれども、その座は角立てずに然るべく禮讃して、競爭して拾ひ取つたりいたしました。その人達は、

「黃金を下さるのはよいけれども、とても笑止な、見苦しいものであつたよ。」

と、今に語り出しては眉を顰められます。それに又人が詩を作つて讀み上げる際にも、優劣を

大きい聲で批判されることがありました。二位の新發意（從二位高階成忠）の學者血統を引いて居られることとて、この御一族は男はもとより、女も皆文才がおありになつたのです。その母君は卽ち名高い高内侍（貴子）ですよ。しかし内侍は昇殿を許されなかつたので、行幸や節會の御祝儀の折などには、よく南御殿の紫震殿に參られたものでした。此の人は本格の漢文家で、御前の作詩の時などにはよく詩を奉られたといひますが、いゝ加減の男文人はたじ〳〵であつたといふ評判でした。さやうの場合の御召にも、臺盤所の方からは上らずに、弘徽殿の上の御局の方から伺つて、二間に畏つて居られたものだと承りました。昔氣質のところがあつたのでせうね。よく女が餘り學問の出來るのはよくないと申しますが、この内侍が、後になつてひどく零落されたのも、その爲めかと思はれますよ。

さて此の帥ノ宮の北の方のすぐ次ぎなる第四の姫君を御匣殿と申しました。容貌の大層優れた方で、式部帥ノ宮（敦康親王）の御母代となつて居られましたが、御わかい中に果敢なくなられました。

同じ腹からの女君達は、まづかくの通りです。

對の御方と云はれた人のお腹にも女君が御生れでしたが、その方は今の皇太后ノ宮（妍子）の御許に仕へて居られます。

またこの外に聞えた男君達は第一に太郎君。これは故伊豫ノ守守仁ぬしの女の腹ですよ。大千代君と申してな。これをば、祖父大臣（兼家）の御子の名義にして、道頼ノ六郎君と云はれましたよ。大納言まで立身されましたが、父の關白殿（道隆）が亡くなられたと同じ年（長德元年）の六月十一日に引きつゞいて亡くなられました。御年は二十五と承りました。御容貌は非常に美しく、人間には勿體ない位、繪の中からでも拔け出て來られたかと思ふやうでした。それに御心持が他の御兄弟には似ず、非常に溫良で、同時に洒落なところも御ありでした。この殿は一人腹ちがひでいらつしやいます。

皇后ノ宮(定子)と同じ腹で、法師になつて、十歳あまりの時分に僧都にして上げられた隆圓の君、これもはやく三十六歳で亡くなられました。もう一方は小千代君と云つて、これはかの腹ちがひの大千代君をば遙かに凌駕して、二十一歳の時に父の關白が、もう內大臣にして上げられ、また關白が亡くなられた年には、重態になる間際に參內されて、

「わたくし斯樣の體に成りましたについて、其の間この內大臣伊周のおとどに、百官統率、大政執行の宣旨を下し賜はるやうに・・・」

と、奏聞して、勅許を得て、その上で、自分は出家されたので、世間が此內大臣を關白殿として追隨歸服して居りますと。その關白職が突然粟田殿(道兼)に渡つたのです。まるで手に据ゑた鷹を逃がしたやうな心地で、中の關白家の一大事と歎いて居られると、代はつた方の新關白も、まるで夢のやうに七日目に亡くなられて、今の入道殿(道長)がその年の五月十一日から、天下を治められることにはなつたのです。かくして內大臣がまた更に人聞き笑止の醜態を恥ぢて居られる中に、翌年はまた花山院に對し奉る大失態が降つて湧いて、官も位も取り上げら

れ、只だ太宰の權ノ師になつて、長德二年の四月二十四日を以て配所に下られたのでありました。御年二十三。何ぼう哀れに悲しかつたことではありませんか。しかし、かやうの事は、必ずしも自分の過失の爲めにのみとは限りません。滿つれば虧くる習ひ、萬事身に餘つた人のかういふ目に逢ふのは、漢土にも本朝にも、よく有ることで御座いますよ。昔は北野の御事がそれで・・・」

など云つて、涙ぐんで鼻かむ樣子も可哀相に見えた。

「この殿も、日本が容れきれぬ程の才能を持たれたので、自然かういふ珍事も出來したのであらうと思ひます。

その中に式部卿ノ宮(敦康親王)が御生れになつたので、その御悅びの爲めに御召還の御沙汰を拜されました。さて又准大臣の宣旨を蒙られて、餘所あるきを始められましたが、そのお容子が、いかにも不謹愼で落つきを缺いて居られましたよ。ひどく見苦しい事ばかりが、どんなに澤山我々の耳に入つたことでせう。或る時のこと、參內されるとて、北の陣から入つて、西の

方へいらつしやると、丁度入道殿(道長)も參内の途中で、その下人どもが梅壺の東の塀際の狹い所に數多集まつて居たのを、この帥殿の者どもが荒つぽく追ッ拂ひました。下人等は行くべき所もないので、梅壺の塀の内へ、ばら〳〵と立ち入りました。入道殿は怪しからんと思つて見て居られる。他の人々も奇怪な仕業と見てゐたが、帥殿に遠慮して、手を出しかねて居る中に、某とか云ふ入道殿の御隨身が、素知らぬ振して、亂暴に外の方へ押出し始めると、人々が雪崩を打つて塀の外に出る。と、今度は帥殿の御供も人波に逆らひかねて後に引いたが、肥え太られた帥殿が、揉み立てられて素早く歩み退くことも出來ず、到頭筋向ひの登花殿の細殿の蔀に、ぐい〳〵と押付けられました。そして

「やあ、〳〵。」

と叫ばれるが、所は狹し、人は多し、殊に雜人どもが大勢彈みを食つて押して來るので、早速には脱け出しかねて、その御容子は實に不體裁極つたものでしたよ。これは別にこの殿の過失といふわけではないが、唯だ見え坊らしい外あるきや花やかな振舞を愼まれたら、こんな輕々

しい笑はれ草が起こるものかといふので、お話をするのです。

また入道殿(道長)が金峰山に參詣された時、途中で、帥殿方に不穩の企があるといふ噂を聞かれて、特別に警戒されたが、何事もなく平安に歸られました。同時に帥殿の方へも、しかじかの噂が入道殿の耳に入つたといふ事を知らせた人があつて、笑止の沙汰とは思はれながら、無實にしても、其のまゝにしてはおけないので、釋明の挨拶に出られました。入道殿は道中の見聞など面白く話されましたが、帥殿がひどくおど〳〵して居られるのを、をかしくも、同時に氣の毒にも思はれて、

「久しく双六をしないので、氣が晴れ〴〵いたしませぬ。今日は一つ、やつていらつしやい。」

と云つて、双六の盤を取り寄せて、盤面を拭つたりして居られると、御容子がすッかり直つて來られたので、入道殿を始め、居合せた人々が、しみ〴〵哀れを催されたといふことです。あ

れ程の大事を聞かれたからには、少しは殺風景な待遇をされさうにも思はれたが、入道殿はどこまでも同情のある御人柄なので、殊に他人が、屹度かうするだらうと豫想する事をば、わざと反對にやさしくあしらはれたのでありました。

さて此の博奕の双六は、御二人ながら大のお好みで、さア打ち始められるとよく着物を脱ぎ捨て、裸身になり、腰だけ蔽つて、夜半までも、曉までも續けられるのでありました。それに帥殿は子供めいた人で、萬一取りのぼせて、間違ひでもあつてはと、入道殿に御意見をする人もあつたものです。これには又御賭物が大變でしてね。帥殿は古器物の何とも云はれぬ味のあるものを、入道殿は新らしい物で趣の豐かなものを、それ〴〵面白い趣向を考へては、取りつ取られつされましたが、かやうな慰みごとでも、帥殿は始終負け〳〵して歸られたものでしたよ。

しかしながら、帥殿は、今のところ、定子皇后所生の第一皇子（敦康親王）のいらつしやるのに將來の望みを繋け、世間の人も、入道殿に靡きながら、内々は帥殿に追從もし恐れても居り

ましたが、その中に、彰子中宮のお腹に今上、東宮（後一條天皇、後朱雀天皇）と、引きつゞき御生れになつたので、すつかり世の中を悲觀して、幾月か病みつゞけられ、段々重られて、寛弘七年の正月二十九日に到頭亡くなられたのでありました。御年は三十七と承りました。御最期近くなられても、さまで苦しまれることがなかつたと申します。喘息でもあらうかなどと思つて居られる中に、重態になられたので、祈禱をしようとて、坊さんを召されたが、來る者がないので、どうしようかと云つて、到頭御子息の道雅君をお使に立てゝ入道殿へ遣はされました。

もう夜も大分更けて、人も寢靜まつてゐましたので、道雅君はすぐに御格子の前に立ち寄つて、咳拂をされました。内から

「誰れぞ。」

と問はれる。名乘をされて、

「かやう〳〵の次第で、祈禱を始めたいと思ひまするが、阿闍梨に來てくれる者がありませぬ。呼んで戴きたう御座りまする。」

と云はれると、

「それは不都合千萬。ちつとも存ぜずに居りました。只今御氣分はいかゞいらせられる。實に不屆きの至りです。」

と、ひどく驚かれて、

「召されて參らぬは、誰れ〳〵です。」

など委しく問はれて、某の阿闍梨を差出されたのでありました。

しかし世の中がもう末で、人の心も弱くなつたといふのでせうか、

「帥殿も、あれでは、ひどく入道殿を怨まれた。」

なぞと、よく世間で言ひましたけれども、元方の大納言のやうに思ひ切つた祟りはされません でしたよ。しかし是れは、一つは入道殿の運勢威力の勝れて居られる爲めでもありませう。老人並に、つい過言を申しましたよ。」

と、羞恥む氣色で、此の邊少し聲をおとして、ひそ〳〵と物語つた。

「源大納言重光卿の御女の腹に、女君二人、男君三人居られましたが、いづれも成人されました。殊に女君は皇后候補の豫想で、大切に育て上げられましたが、豫想が片端から喰ひ違つて、最後に御病氣までが、かうも重くなられたので、この姫君達をお枕もとに据ゑ並べて、泣く〳〵遺言をされました。

「久しく神佛を大事にしてゐたので、不如意の中にも、つまりはと、萬事を賴みにして來たのに、こんな情ない死に方をするとはほんとに悲しい。かうと知るなら、君達をこそ、私より前に死ねかしと、祈るべきでありましたよ。私が死んだら、君達が、どんな事をされるだらう、どんな風になられるだらうと思ふと、堪らないのです。萬一にも世間の物笑ひになるやうな……」

と言ひかけて、泣き獻欷りつゝ、

「……見苦しい眞似をされたら、此の世を去つても、必ず恨みますぞ。」

と、娘達の母、北の方までを一緒にして、泣く〳〵遺言をされたのでしたよ。その姫君達の中、

大姫君は、入道殿(道長)の高松夫人の腹なる頼宗の春宮大夫殿の北の方となつて、數多の御子達を生みつゞけて居られるやうです。無論それは悪い事ではありません。もうお一人は大宮(道長の女、彰子中宮)に仕へ、「帥殿の御方」と、親の御名まで名乗つて、大層立派な御身分になつていらつしやるらしい……とは又、帥殿の靈も意外とされる成行であつたでせう。人の世の哀れとは、まあこんな事でせうか。

男君は松君と云つて、お誕生早々から、お祖父様の大臣(道隆)が又なく可愛ゆいものに思召して、「來い〳〵」と呼んでは、その度毎に、よい物を差上げられ、乳母までを御愛想遊ばしたその君ですよ。この頃は、もう三位になられたやうですね。この君に對しても、父の大臣が、

「くれ〴〵も申しおく。我が亡からん後に、見苦しい眞似はしてくれまいぞ。また出家が出來ぬと云つて、まさかと考へもしなかつた名簿などを持ちあるいて、權家に面謁を乞うては、父たる我が面に泥を塗り、「あれ見よ、あゝであつた帥殿の若君が、かうもなられた」

などと世間に言はせてはくれるなよ。萬一この世に存へかねる場合に出會したらば、出家するばかり、唯だ出家するばかりぞ。」

と、泣く〳〵言ひ含められたのに、その君が、今上の東宮であらせられた折の次官になられたので、誠に結構な事と見て居ると、その中に「春宮亮道雅の君」といつて、評判ものになられましたからね。ところが、それもどうしたのか、東宮御即位の際に藏人ノ頭になるとも出來ず、唯だ春宮御所に長く勤めた御慰勞に、三位だけを賜はつて、中將の兼務もせず、それきりになられたといふのは、ほんとに悲しい次第で、實にあさましい、思ひもかけぬ事だらけでしたよ。

この道雅君は故の帥の中納言惟仲の女に通はれて、男子一人儲けられましたが、それは法師となられて、明尊僧正の僧房に御修行中だといふことです。その女君が、どう思はれたのでせうか、こつそりと逃げ出して、處もあらうに、今の皇太后の宮に仕へて、大和ノ宣旨と云つて居られますよ。だから年久しい妻子だからと云つて、頼みになるものではありません。どこ

ろか、それが却つて夫を馬鹿にして、此の通り赤恥をかゝせるではありませんか。あゝ〳〵、此の爺が相契の小童女などが、假りにもそんな眞似を致しましたら、白髮をも剃りこくり、鼻先をも引搔き落してやりますわ。それを、上つ方と申すものは、お結構な御名が惜しさに、どうもかうもなさらぬといふのでせう。と申すは、彼の君、阿呆ならばとにかく、別に阿呆でもいらつしやらないぢやありませんか。分別心は立派に持つていらつしやる方ですのにねい！

帥殿（伊周）は、あの今上（後一條天皇）が御誕生遊ばした時のお七夜の御祝儀に、奉祝の和歌の序文を書かれたんですよ。書かぬに劣つた無分別のことですわねい。本來は列席もされまじき席に、出しやばられたこととて、並み居る人が目をつけて、

「どういふお考へだらう。」

「何の爲めに來られたらう。」

などと云つては、その一擧一動に注目されなすつたのですよ。不都合なことではありませんか。それをかの入道殿（道長）が座の白けぬやうに、うまく取りなされた甲斐があつて、その結果は、その序文を憎い程うまく書かれましたよ。そして其の當座は大持てで、人々も皆、うまい！　えらい！　と褒めちぎつたものでしたよ。

この帥殿と同じお腹の弟君に、十七歳で中納言になつたりして、世間から「意地わる」と云はれた隆家の殿が居られました。あの殿も幼名は可愛らしく阿古君などといはれたものです。兄君のあの花山院事件の大騷ぎに、連坐を喰つて、出雲ノ權ノ守に貶されて、但馬に居られました。さて帥殿が赦されて都に歸られた折に、此の殿も上られて、もとの中納言になつたり、又兵部卿などと云はれたりされたこともありました。えらい才略のある人と、世間から思はれなすつたものでしたよ。數多の人々の下風に立つことを、一面不愉快に思はれながら、時折世間に顏を出されることもありましたが、その中に、關白（道長）の賀茂詣の供をされたことがありました。が、遙か後ろに引き下つて居られるのが氣の毒さに、入道殿が我が車に乘せて道々こま

やかな物語をなされた序に、入道殿が

「いつかの事は、自分が申し行つたやうに、世間では言つて居ります。其許もその通り思つて居られたであらう。しかし、さうではありません。勅諚ならぬ事を、道長一言たりとも加ふるに於いては、今日此の御先祖の御社に、かうして參詣することが出來ますか。天道も御照覽あらせられる。實に恐ろしい次第で……」

と、入道殿が眞面目に言はれたのには、こちらが却つて面も上げられず、たまらない苦しい思ひをした」と、後日この殿が言はれたと申します。それも此の殿なればこそ、入道殿がさうも仰せられたのでせう、帥殿には、どうしてそれまでの言譯などをされるものですか。

この中納言はこの通り、據ろない場合々々に外出するだけで、もう昔のやうには世間交際をされませんでしたが、或る時入道殿の土御門殿で、御遊の催しがあつて、殿が

「かういふ催しに、權中納言の居ないのは、やつぱり淋しいわ。」

と言はれて、わざ〳〵招待の手紙を上げられました。それから杯が幾度もめぐつて、人々が酩酊して紐を解き放つて居られる處へ、この中納言が見えられた。皆が立派に改まつて、俄に居ずまひを正される。あるじの殿が、これを見て、中納言に

「まづとにかく、御紐をお解きなさいよ。折角の興が醒めますわ。」

と云はれたので、かしこまりながら、躊躇して居られるところへ、公信卿が後から

「わたしが解いて上げよう。」

と云つて、さし寄られると、中納言殿が氣色を損じて、

「隆家、不運でこそあれ、貴公等にうつけた眞似をさるべき身ではありませんぞ。」

と、言葉に角が立つて來たので、人々が顏色を變へられる。中にも、今の民部卿殿(俊賢)は、びツくりして、上目を使つて、皆の顏を見い〳〵、さあ一大事が起こるぞ、飛んでもない事になつたと思つて居られる。そこを、さすがは入道殿、から〳〵と笑はれて、

「今日はそんな冗談を止しませうよ。さあ〳〵道長が解いて上げる。」

と云つて、近く居寄つて、はら〳〵と解かれると、

「これでこそ上々吉。」

と、すつかり機嫌を直して、休ましておいた杯を取り上げて、なみ〳〵と幾度も重ねて、すつかり羽目をはづして、面白く舞ひつ奏でつして遊ばれました。その様子の面白さ、それが此の上もなく興を呼んで、あるじの入道殿も悦に入つて、やんやと囃されたのでありました。

さて頼みを懸けられるのは式部卿ノ宮（敦康親王）の御事ばかり、「それにしても」と立太子の折を待つて居られましたが、一條院の御病氣御重態にならせられた時、御前に近う參つて、御意向を伺ひ奉られると、

「あの事は、到頭決行かねたよ。」

と仰せられたので、

「かッとなつて、「情ない人非人が！」と、恐れ多い事ながら申上げたい氣がしたよ。」

と、言はれたといふことです。さて御所を退出して、我が家の日隱の間に腰を掛けて、「あはれ、しなしたり」と絶望して、手をはた〳〵と打つて居られました。世間では、式部卿ノ宮立坊の御事があつて、此の中納言殿が御後見でもされたら、天下の政事の釣合が取れて落ちつくであらうと期待してゐましたが、高運に乘つた入道殿の御榮花が、がッしりしてゐて、とても分割されることが出來なかつたのでせう。

三條院御即位の折に於ける大嘗會の御禊の御儀に、此の殿が豐麗に裝はれた御容子は、不斷とは違つて恐ろしく引立つたものでした。世間が、御失意の際でもあり、いかに何でも、滅入り氣分で居られるであらうと豫想してゐた、その裏を掻いてやらうと思召したものと見えます。さういふ所がおありになつたればこそ、節會や行幸の折には本來掻練重は着ぬ例になつてゐるのを、此の殿は掻練の下に青い單衣を重ねられ、それが紅葉重に見えて實にお立派なものでした。それに表袴が龍膽の二重織物で、これまた實に結構で、綺麗で、異彩を放たれましたよ。

御目を損はれてしまつたのは、實に惜しい事でした。いろ〳〵と療治は試みられたが、どうしても癒らぬので、世間交際も出來なくなられた時分に、太宰の大貳の闕官が出來て、人々が大騒ぎをして競爭しましたが、此の殿は、九州には唐から來た眼科の名醫があるといふ、それに診せて療治をしようと考へられて、ためしに

「是非なりたい。」

と云つて所望されました。それは三條院の御代でもありましたが、一つは可哀相にも思召したのでありませう。二度と願はずに任官されたのでありましたよ。

その北の方は伊豫守兼資ぬしの御女です。その御腹に女君が二人居られました。一人は三條院の皇子の式部卿の宮（敦儀親王）の北の方、もう一人は前に言ひました傳の殿道綱の君の御子宰相中將兼經の君の北の方で、小宰相の上と申しました。かやうにお二人いづれにも立派な聟君を迎へられて、大層大事にされて居られるといふ評判です。

太宰府では善政を施されて、九州の人達全部が悦び服したといふことでした。そして、例の大貳の任期六ヶ年を立派に勤めあげて都に上られたと申します。

その筑紫に居られた時分のこと、刀伊ノ國の者どもが、我が國を伐ち取らうと思つたのであらう、不意に海を越えて來寇した。筑紫には豫ねての用意もなし、大貳殿は弓矢の本末をも知られないので、どうしたものかと思はれたが、さすが知謀に富んだ人で、筑後、肥前、肥後、その他九州一圓の兵士共を召集されたことは勿論、府内に勤めて居る者までを徵發して戰はせられたので、向うの奴原が數多戰死して無事に收まりました。畢竟、武事に暗いとはいひながら、家柄の威光で、此の大事の國難を平らげられたといふのでせう。一體朝廷も、此の殿を大臣なり大納言なりに御任じなさるべき筈でしたが、明を失くされて交際を斷つて居られるので、そのまま何の御沙汰も無かつたのだらうと思ひます。

その折に專ら敵を射返して勇戰した者どもの名を記して上聞に達せられたので、悉くに恩賞の御沙汰がありました。大藏種材は壹ノ岐守に任ぜられ、その子をば太宰ノ監にお任にじなりま

した。

この種材の一族は純友を討ち亡ぼした者の血統です。その純友は、將門が同心させ、仲間に引き入れて、恐ろしい事を企てた男です。將門は

「御門を討ち取り奉るであらう。」

といひ、純友は

「では、御身の關白にならう。」

といひ、心を合はせて、この世の中に、自ら政事を行はう、自ら天子となつて暮らさうといふ恐ろしい事を約束して、一人は東國に軍勢を集め、一人は西國の海の上に、何處からともなく大筏を無數に集めて來ました。そして、其の筏の上に土をふせては、植木をはやし澤山の田を作り、住居まで定めて、いゝ加減の討手には、凡そびくともせぬやうに、猛勢になつて來たのを、此の種材が巧みに謀を構へて討ち滅ぼしたのは、實にえらい事でした。しかしそれは實は、

彼等が利巧なためのばかりではなかつたでせう。王威のつゞかせらるゝ限りは、どうして謀叛人などの榮えるといふ事があるものかと思はれますからね。

扨刀伊の寇は壹岐、對馬の住民等を多勢擒にして連れて行きましたが、新羅の帝が軍勢を出して、擊ち破つてその生捕を悉く取り返されました。そして使者をつけて、無事に二つの島々に送り返されたので、大貳は其の使者に黃金三百兩を取らせて歸されました。この最後の交渉を、此の通り立派に取捌かれたので、入道殿(道長)は、やはり、此の殿をば、捨てられぬ人物と重く視て居られたのです。だからこそ世間からも、とても見放ち難いものに思はれていらしたのでせう。その證據には、殿の御門に、いつ馬や車の三つや四つ絶えたことがありました？また馬や車が、避け切れぬほど立て込んだこともあるではありませんか。

此の殿の御子達、男君は今の藏人ノ少將良頼の君、それから右中辨經輔の君などでいらつしやるやうですね。

おゝそれ〳〵！　全盛の花ざかりに、この帥殿が花山院と大爭鬪を演ぜられたことがあるといふことです。實に亂暴極まつたことですわね。それは、花山院が

「いかに和主でも、我が門前を通過は出來まい。」

と仰しやると、

「この隆家が、何の通れぬことが御座りませう。」

と言ひ張られる。そして到頭通過の日取を何日の何時と定められました。

帥殿は頑丈な輪の車に逸物の牛を繫けて、烏帽子、直衣と美々しく裝束されました。さて葡萄染の織物の指貫を穿き、少し乘り出しめにして、賀茂祭の還立に紫野を走らせる君達を見るやうに、踏板の上に諸足を威勢よく踏みはだかり、指貫の括紐をば長やかに地を曳かせ、簾をば高々と捲き揚げさせて、從者は五六十人、聲を限りに、先を追はせて行かれました。

一方、院に於かせられては、云ふまでもなく勇悍無類の荒法師ども、それに大童子、中童子まで、合はせて七八十人ばかりに、大きな石や五六尺の杖など持たせて、北の御門、南の御門

から築地づら一帶に、それから小一條の前に、洞院の裏に表にと、隙間もなく立ち並ばせて、御門の内にも、年若い侍や僧侶の力强い者を擇りすぐつて、待ち受けられました。狼藉好みの事あれかしと待構へてゐる上下の手合の、今日を待ち得て奮ひ起つた武者振りは、どんなであつたでせう。但し双方とも石と杖ばかりで、本物の弓矢を用意されなかつたのは、せめてもの事でした。

さて中納言殿は、御車をば物の一時ばかり立てゝ、じつと形勢を窺はれました。やがて機を見て、勘解由小路から北を指して御門近くまで威勢よく寄せられましたが、到頭通過しかねて、歸られました。院方では、集まつた大勢が、同じ心に傍目もふらず見つめてゐたが、引返される途端に、一度にどッと笑つた、その聲の夥しさ。いや、こんな見物ッて、世の中にあるものですかね。後日中納言は

「やつぱり王威は恐れ入つたものであつた。通れずじまひで、大失敗さ、益もない事を云つたもの。飛んだ恥をかいてしまつたわ。」

と云つて、笑はれたといふことです。院は勝たせられたのを、えらい手柄と思召した御容子でしたが、事にもこそよれ、まるで本物の軍のやうな沙汰ですわね。

この師殿(伊周)の御兄弟といふ君達は、澤山いらつしやるでせう。しかし頼親の内藏頭、周頼の木工頭など云つた人は、片端から亡くなられて、今では唯だ兵部大輔周家の君ばかりが、稀薄な存在を見せて居られるだけになりました。この人は小一條院の宮樣達の御乳母の夫で院の御所に精勤して居られます。御氣の毒な次第ですね。また井手の少將といはれた君(好親)が居られたが、これは出家されたとか聞いてゐます。故の關白殿(道隆)は御心持の非常に立派な、氣品の高い人でしたが、御子孫は振はない、短命の方ばかりでした。今は、あの入道一品宮(修子)と、この師の中納言殿(隆家)だけが、殘つて居られるやうですよ。

一 右大臣道兼

この大臣は大入道殿(兼家)の御三男で、世に粟田殿と呼ばれなすつたやうです。長德元年五月二日に關白の宣旨を蒙られて、同じ月の八日に亡くなられました。御年は三十五歳。大臣で五年、關白と申して、唯だ七日だけ御在世でしたよ。この殿方の御一族の中には、攝關とならずに、一生を終へられた御連中も、それは澤山ありますけれども、しかし又とはありますまいよ、成りながら、夢のやうに數日の中に果敢なくなられた人は。

この殿に關白の宣旨の下つたのは、丁度出雲ノ守相如ぬしの家に一時逗留して居られた折でした。家主人の相如ぬしの悅びは殊の外でしたが、その家では手狹で、御禮の參內その他の作法にも事缺くとあつて、そこを立つて本邸に歸られ、そしてその日すぐに悅申しの參內をされたのでありました。その折の殿の御前驅は、すぐれて立派な者ばかりを選まれましたが、北の

方が後から二條の本邸へ歸られる折の供人は、身分のよい者、わるい者をごッちやにして數知れぬまで多く、中には無紋の狩衣を着た者も雜つてゐた位であつたといひます。從つて殿の參內を御見送りして北の方の歸館をお迎へする前後の邸內の陽氣な騷ぎ、人々の昂奮振は、御想像に任せますが、中には少し仰山過ぎると云つて非難した人もあつた位でしたよ。

その折に殿は氣分が少し變だとは思はれましたが、何一時の事であらう、これ式の事で、大切な今日の奏慶を中止してなるものかと、我慢して參內されると、急にひどく苦しくなられました。それで、尋常に殿上の間から退出されることが出來ず、御湯殿の馬道の戸口に前驅の者を呼んで、その者等に依りかゝつて、北の陣から出られたので、見る人々が、まあどうなされたのだらうと驚いたのでありましたよ。

本邸では大掛りの準備を整へて、殿の御歸りを今か〳〵と待つて居られると、人々に介抱されつゝ、御冠もしどけなく、御裝束の紐も解き放つて、ひどく苦しさうに、よろ〳〵として、車から下りられたのを迎へられた心地は、御出かけの折とは、譬へようもない相違でありました。しかし、ひそ〳〵話にこそ不吉の豫想もさゝやけ、胸の塞がる心地はしながら、表面は愉快さうに裝つて、「それにしても大丈夫、やがては」などと言ひ交はして居りましたから、世間には、さうえらい事とも聞えなかつたのです。

今の小野ノ宮の右大臣殿(實資)が御悅びに見えた折には、母屋の御簾をおろし、寢所を隔てゝ請ぜられました。臥みながら對面されて、

「氣分が甚だすぐれませんので、座敷に出て御目に懸かることも出來ず、かう臥しながら物を隔てゝ申上げるのです。君の御芳情に對しては、年來些細の事につけても、心中ひそかに感謝して居りながら、甲斐なき身の程を顧みつゝ、事每にも御禮を申上げ得ずに過ぐして參りました。今度はかやうな身分にもなりましたので、公私につけて御報恩もいたしたく、また事の大小によらず御談合を願ひたいと存じますので、無禮とは存じながら、かく取亂した所へ御案內を致しました。」

などと、何やらくど〳〵と言はれるけれども、詞もつゞかず、たゞ當て推量に、この位の事かと聞き取られるだけでありました。

「それに御息づかひなどが、ひどく御苦しさうなのを、困つた事だと思つてゐると、折しも風が吹いて來て御簾を吹き上げた。その隙間から見入れると、何しろ、あれだけの大病を受けられたのだから、どうして並々の御容子であるべき筈がない。すつかり蒼ざめた、まづ死相で、あの色つやの好い人とは、とても思はれず、全く意識を喪つた人のやうになつて居られたよ。しかし、さうは見えながら、長い將來の事を、いろ〳〵と話されたのは、實に無殘であつたよ。」

と、これは殿が後に話された事でありました。

この粟田殿に男の君達が三人居られました。御太郎を福足君といひましたが、幼い時分は誰れもそんなものと思はれるが、これは又念入の旋毛曲で、質のわるい駄々ッ兒でいらつしやいましたよ。東三條殿(兼家)六十の御賀筵のあつた時のこと、この君に舞を舞はさうとて稽古をさせられたことがありましたが、稽古をされる一寸の間も、意地わるく「否々」と云はれるので、いろ〳〵と瞞しすかし、神佛にお祈りまでして、やつと敎へ込まれました。扨其の日になつて、立派に裝束をさせて出されましたが、いよ〳〵舞臺の上に登つて、丁度伴奏の笛を吹き出した折も折、

「わたしは舞はぬ。」

と云つて、鬢づらをめちやくちやにし、裝束をばら〳〵に引き破られました。お父樣の粟田殿は御顏を眞蒼にして茫然自失の御容子である。ありとある人、

「どうも、かうなるかと思つたわ！」

と思つて見て居られたが、唯だ見るだけで、手のつけやうもなくて、居られる處へ、御伯父君の中ノ關白殿(道隆)が席を下りて舞臺に參られました。

うまく賺されるか、それとも腹立ちまぎれに、追ひおろされるかと、誰れも〳〵見て居ると、

こは如何に！　そのむづかる兒を、あやしつゝ、腰のあたりに引きつけて、相舞がかりに、御自分の手で、面白く舞ひすまされましたよ。是れで伴奏も一段と面白くなり、お子さんの恥も隱れて、その日の興も格別に引立つたのでした。お祖父様もうれしいと思はれました。父の大臣は申すまでもなく、餘所の人までが我れ知らず、感歎の聲を揚げられました。中ノ關白殿はその通り人の爲めにやさしい親切なところが御ありになりましたのに、どうして御子孫がかぼそく衰へられたことでせうねい。

この福足君は、人にもよりけれ、大臣家の御子が蛇責めをして、その祟りで、頭に腫物を出して亡くなられたと申します。

その弟の二郎君、即ち今の右衞門ノ督兼隆卿は大藏卿遠量の女腹の生れです。この右衞門ノ督に男女澤山の君達が居られます。大姫君は三條院の第三の皇子敦平の中務ノ宮を、この二月とか言ひましたよ、聟君にされましたが、昨日今日のお睦ましざかりと見えます。

また粟田殿の三郎は前ノ頭ノ中將兼綱の君です。此の君が賀茂祭の日に新調された車が、非常に面白いといふ評判でした。先づ車體には檜網代といふ物を張つて、的と見えるやうに彩色し、車の左右の物見の窓をば、弓の形にして、緣を矢の形にされた、それが面白いといふのでした。和泉式部の君の歌の

十列の馬ならねども君乘れば
車も的に見ゆるものかな

＝わたしは十騎並んで駈ける祭の舞人の射手ではないが、君の乘られたのを見ると、車がそつくり的に見えますよ＝といふのは、之れを詠んだのです。

さて洒落れた物數寄とは見えましたが、人の口は困つたもので、

「あれ、賀茂の明神様の矢疵を負うていらつしやる。」

などと、不祥をつけられたので、いやになつて廢めてしまはれましたよ。此の君が頭（藏人頭）

を取り上げられなすつたにも、えらい事情があつたのでした。それは頭になる事は、此の君に取つて當然で破格の名譽とする程の事でもなかつたのですが、

「父の粟田殿(道兼)は花山院を欺いて帝位を下りさせ申し、兄の右衞門ノ督(兼綱)は小一條院を欺いて、東宮の位をおろし申された。これは帝東宮の御身邊に近づくべからざる物騒な血統だ。」

といふやうな噂が立つたその結果であつたのです。實に珍しい事でしたわね。誰方も御存知の事ですけれど。

御子息達に關する消息は右の通り。女君には故一條院の御乳母藤三位の腹に生れられたお方(尊子)があつて、その後同じ帝に入内されて、倉部屋の女御と云はれました。それが後にあの大藏卿通任の君の北の方となつて亡くなられましたよ。また佛神に祈つて得られた本室北の方腹の女君は、二條殿の御方と云つて、現に中宮(威子)に奉仕して居られるさうです。これは父

の殿が女の子ほしさに、折角願立てまでされましたが、その御子の顔も見ずに薨去されたといふ次第で、世にはかういふ哀れな事もあるのですよ。粟田殿の御本室は殿に後れてのち引きつづき堀川殿(兼通)の御子息の左大臣殿(顯光)の北の方となつていらつしやると伺ひました。その北の方と申すのが卽ち九條殿(師輔)の御子大藏卿の君(遠量)の女ですよ。かう見ると、粟田殿の御一生も存外振はないものでしたが、それは御心持に無情な酷いところがあつて、人に怖がられる人であつたので、不思議にも御子孫の榮えを見ずに終はれたのでありませう。

この殿は、父君東三條殿の御忌中にも、土殿(土間御殿)での御謹慎などもなく、暑いのにかこつけ、御簾なども片端から揚げさせて、念佛讀經の奉仕などもされませんでした。のみならず然るべき人々を呼び集めて、後撰集や古今集などを繰りひろげては戯言に興じつゝ、少しも嘆き悲まれる御樣子がありませんでした。その理由は、花山院をすかしておろし奉つたのは自分ではないか、然らば關白職をもお讓りあるべきにといふ恨みからであつたと申します。變はつた恨みもあるものですわね。此の外にもいろ〳〵よくない噂も聞えましたが、傅ノ殿(道綱)入道

殿(道長)のお二人は、形の如く立派に佛事供養を遊ばされたと承りました。

一　太政大臣道長

この大臣は法興院の大臣(兼家)の御五男、御母は從四位ノ上行攝津守右京ノ大夫藤原中正朝臣の女であります。(行は位高く官卑きの稱)中正朝臣は從二位中納言山蔭卿の七男であります。この道長の大臣が卽ち只今の入道殿下にいらせられまする。畏くも一條院、三條院の御叔父君、今上、東宮の御祖父君にいらせられます。この殿は參議を經ずして、直ちに永延二年正月二十九日を以て權中納言にならせられました。御年二十三。その年に上東門院(彰子)が御生れになりました。正曆三年四月の二十七日、從二位になられました。それは中宮ノ大夫と云はれた時で、御年は二十七、丁度宇治殿(關白賴通)が御生れになる年です。長德元年四月二十七日に左近衞ノ大將を兼ねられました。

その年(正しくは正曆五年)の賀茂祭(四月中旬の酉の日)の前から、世の中が恐ろしく物騷になり

ましてね、翌年になると、更に恐ろしさを加へて參りましたよ。それは御存じの疫病の大流行で、第一に大臣公卿の大官達が澤山亡くなられました、まして四位五位程度の死者などが數へきれるものですか。先づ初めの年に亡くなられた殿達の數、極めて主なるものだけを擧げても、閑院の大納言殿(朝光)は三月二十八日に亡くなられました。中ノ關白殿(道隆)は四月十日に、但しこれは流行の疫病の爲めではなく、同じ折の指合はせであつたのです。小一條ノ左大將濟時ノ卿は四月の二十三日に、六條ノ左大臣殿(重信)、粟田ノ右大臣殿(關白道兼)、桃園ノ中納言保光ノ卿、この三人は同じ五月八日に一度に亡くなられました。山ノ井ノ大納言殿(道頼)は六月十一日です。しかも御年二十五といふ若盛りに。又とはありますまいよ、近年は勿論、遠くの昔にも、かう大臣公卿が七八人も、二三ケ月の中に掻き掃つたやうに、ばた〳〵と逝かれるとは。實に稀有の出來事ですが、しかし是れも唯だかの入道殿の御幸運が無上無限無邊際であらせられた爲めでせう。何故と仰しやい。若しあの殿達(高く言ふことは憚るが道隆、道兼等の兄君達)が、順序通りにゆつくり長生きして居られたら、どうして斯うとん〳〵拍子に運ぶものですかね。それよりも

先づ、あの帥殿(伊周)が賢明でいらしたならば、……已に父大臣(道隆)の御病中に、關白代理大政執行の勅命が下りました、そのまゝ自然、ずる〳〵で据わり通されるかも知れないではありませんか。それに重なる御幸運は、兄大臣(道隆)が亡くなられると、小兒赤ノ坊のやうな氣持の伊周等に、大政の料理が出來るものかといふことで、關白職が粟田殿に渡つたでせう。「瓜がほしくば、入物持て來」といふ諺もありますからね、粟田殿の繼がれたは然るべき順序で、また當然の任命であつた……のが、又あさましくも夢のやうに取りもあへず、亡くなつてしまはれましたよ。こんな事ッて、まああるべき事でせうかね。

あの今の入道殿は、その折大納言、中宮ノ大夫と云つて、御年は若く、氣力旺盛前途多望、これから運命を切り拓くといふ丁度御年輩でしたが、この三十歳といふ働きざかりで、四月の二十七日に大將になられました。そして五月十一日に內覽關白の宣旨を拜され、先づはめでたく高運の開け始めを見られたといふわけであります。それから同じ年の六月十九日に右大臣になられ、長德二年の七月二十日に又左大臣になられました。そして太政關白の重職がそのまゝ他

門に移らずに參りましたよ。今が今、現にさうではありませんか。

この殿には北ノ政所(夫人)がお二人居られます。あの御后達の御母君の方は、土御門ノ左大臣源雅信の大臣の御女(倫子)でいらつしやいます。雅信の大臣は亭子の帝(宇多天皇)の御子なる一品式部卿ノ宮敦實親王の御子で、左大臣時平の大臣の御女の腹に生れられました。その雅信の大臣の御女が、今の入道殿下の北ノ政所ではいらつしやるのです。その御腹に女君が四人、男君がお二人居られます。此の御方々の御履歴は皆現在の事實で、どなたも御見知りになつてゐることでせうが、序にお話し申さうと思ふのです。

第一の女君(彰子)は、一條院の御時に、長保元年十一月一日、御年十二歳で、女御として御入内あり、翌長保二年二月二十五日、十三歳で后に立たせられて、中宮と申上げました。その間に引きつゞき男皇子御二人を生ませられました、それが今上(後一條天皇)と東宮(後の朱雀天皇)でいらつしやりませう。即ち畏き御二方の御母后、大皇太后ノ宮と申上げて、天下第一の母、

國母でいらせられます。

すぐ次ぎの女君(妍子)は、初め尚侍と申したのが、三條院が東宮でおはした時に召されて妃殿下となられ、東宮が帝位に即かせられると、長和元年二月十四日、后に立たせられて中宮と申しました、御年十九。その翌年長和二年七月二十六日に女御子(禎子)を生まれましたが、その女御子が三四歳で、一品にならせられて、現に御健在でいらせられます。近頃はこの御母宮をば皇太后ノ宮と申して、枇杷殿に御住ひですが、一品ノ宮が准三宮の待遇を受け、千戸の御封を得て御同居になつて居るのですから、此の一つ枇杷殿に、后がお二人いらつしやるやうな姿です。

その次ぎの女君(威子)は、これも初め内侍のかみと申しましたが、今上(後一條天皇)が十一歳で寛仁二年正月三日に元服遊ばされますと、その三月七日に入内されて、同じ年の四月二十八日に女御の宣旨を蒙られました。それは丁度新らしい内裏が落成して御引移りの吉き日でした。同じ年の七月二十九日に立后の宣旨があつて、源民部卿俊賢が御使に立たれました。卿は

折節中宮ノ大夫であつたので、勤められたものでせう。現に中宮様と申上げて大内に居らせられます。

また次ぎの女君(嬉子)は、これまた初め内侍のかみと申して、十五歳の折に、今の東宮(後朱雀天皇)が十三にならせられた年の、丁度治安元年の二月一日に召されて、現に東宮の女御となつて居られます。登花殿に住まれました。道長公が入道された後の事であつたので、今の關白頼通公の御女分にして御さしあげになりましたよ。今年は十九歳にならせられます。孕ませられて、丁度七八ヶ月に當たられます。入道殿の御運勢を御見上げ申すと、これは屹度御男子でいらせられませう。この爺どもが豫言、よもや間違ひはありますまいよ。」

と云つて、誇らしげに扇を高く使つたのは愛嬌であつた。

「女君達に關する御消息は、まづ此の通り。

男君お二方、その第一は今の關白左大臣頼通の大臣で、天下を思ふまゝに治めて居られます。

御年二十六歳で内大臣攝政にならせられたでせうか。その中に帝(後一條天皇)が御成人遊ばされましたので、寛仁三年十二月二十三日に攝政拜辭の表を奉られ、同じ日に關白の宣旨が下つて、今は唯だ關白のお一役で居られます。昔は二十餘歳で納言などになる事をば、えらい立身のやうに言ひはやしたものでしたが、當世の御榮華振りはまづ此の通りですからね。これを宇治殿と申します。幼名を鶴君と申しました。もうお一方は只今の内大臣で、左大將を兼ねられて、教通と申上げます。今の世に於ける二の人といふわけですね。(御兄君が一の人の關白であるのに對して)二條殿と申します。御幼名をせや君と申しました。

ですから、女の幸福を極められたのは、この北ノ政所(倫子)でいらつしやるといふわけですね。古來の幸運の婦人といはれた人達を見ると、或は帝王や皇太子の御母、御后とならせられた御方もあります。或は攝關一の人の娘と生れて、后とはなられたが、皇子をば持たれなかつた御方もありませう。女人としての御幸福は、無論、后が極めて居られることでせうが、しか

しそれは隨分御窮屈なことで、えらい急ぎの事があつても、並々の御身分でないから、自由にお動きになることが出來ません。陣屋を衞士が固めて居るから、女房も思ふまゝ卽座に御用を足して上げることが出來ません。后でもまづ此の通り御窮屈なのですが、この北ノ政所は人臣とは申しながら、帝、東宮の御祖母樣で、三宮並の御位で、千戶の御封を戴いて居られます。年官年爵の特別收入を賜はつて、立派な唐廂のお車で、容易に御外出も叶ひ、見たいと思召す事は世の中の物何でも氣樂に御覽になることが出來、法會などのある時は、御車ででも棧敷でも、自由に御覽遊ばせます。帝、東宮、お后達、これらの御方々は皆離れ〴〵に他人行儀で居らせられますが、北ノ政所は何處へお越しになつても、それらの貴顯方と隣あはせに並んで居られます。現に三人のお后達(彰子、妍子、威子)、東宮妃(嬉子)、關白左大臣、內大臣の御母君で、その上、帝、東宮は申すに及ばず、まづ天下總體の親と申してもよいでせう。入道殿は申すに及ばず、大體このお二方は、ともに神佛などが假りに人間に生れられた然るべき化現の聖者でいらつしやるのではないでせうか。御婚儀以來もう四十年ばかりにもなられませうが、此

の北ノ政所をば、此の上もなく尊いものにしてお愛しみになつて居られます。それに珍しいのは、古今の國母(天子の母)、大臣、皆藤原氏でありますのに、此の北ノ政所が、源氏でありながら御幸福を極めて居られることです。一昨年の六十の御賀の樣子など、どなたも御覽になり或はお聞き及びになつた事ではあるが、いや、返す〴〵えらい事でしたよ。

もうお一人の夫人高松殿(明子)と申すも、やはり源氏でいらつしやいます。延喜の帝の皇子高明親王、これは延喜二十年十二月二十八日に、源姓を賜はり、その後左大臣左大將になられましたが、意外の出來事によつて、大臣を奪られて、太宰ノ權ノ帥に貶して、筑紫に流されの身となられました。實に〳〵御氣の毒な事ですが、高松殿はその姫君でいらつしやりますよ。父の殿が筑紫においでの時分に、此の姫君はまだ極御幼稚でいらしたのを、御伯父君の十五の宮(盛明親王)、これも同じく延喜の皇子でいらせられますが、女の御子樣が居られぬので、此の姫君を引取られました。そして大事に養育していらつしやると、その中に西宮殿(高明)も亡くな

られ、十五の宮もおかくれになりました。それは故の女院（詮子、道長の妹）が后の位に御すわりの時でしたが、この哀れな姫君を迎へ取られて、我が東三條殿の東の對に住ませられました。そして帳を立て、壁代を曳いて、御自分の御居間に少しも劣らぬやうに裝飾し、女房、侍、家司、下人等の附副役まで、特別に設けて、まるで我が姫君などの居られるやうにして、此の上もなくかしづかれましたので、御兄弟の殿方（道隆、兼家等）が、我れも〳〵と爭つて、想ひを懸けられましたが、后が然るべく御制止になつて、結局今の入道殿に許されたといふ事情でした。それから長く通はれる中に、女君二人、男君四人御生れになりましたよ。

女君と申すのはまづ今の小一條院の女御（寛子）、もうお一人（尊子）は——故の中務卿宮具平親王は村上天皇の第七皇子でいらつしやいましたね、その御男君三位中將師房の君を、今の關白殿（頼通）が北の方の兄弟といふ緣によつて養子にされたでせう、—その師房の君の北の方です。是れは入道殿の思召で聟どられたのでしたが、世間では心得ぬことと陰口を云つたものでした。また御うちはの御子息達も面白からぬ事に思はれましたが、しかし入道殿には、必ず

然るべき御見込があつたのでせう。

男君は大納言で、春宮大夫頼宗と云はれます。御幼名はいは君。もうお一人は同じく大納言で、中宮權大夫能信と云はれます。もうお一人は中納言長家、御幼名はこわか君。

さてもうお一人、右馬頭で顯信といふお方が居られました。御幼名はこけ君、長和元年正月十九日に出家されて、それ以來十年餘り、佛樣のやうに勤行して居られますよ。實に思ひもよらぬ哀れなことですね。御自分の御菩提、無上正覺、これは申すまでもないことですが、同時に父君入道殿に數多の御子達がありながら、法師の居られぬのが殘念で事足らぬやうなので、その御爲めにと思はれたのでありませう。だから入道殿も此の君をば、

「その中、一足飛びに僧正にして上げよう。」

と仰しやつたと承りましたが、眞僞のほどは存じません。さて立派な御法服を御姉妹の宮達からも御差上げになり、入道殿からも贈られましたが、世捨人にあるまじき事と云つて、受けられないので、ひどくお困りになつたといふことでした。

家をお遁れ出での日には、緋の袒の澤山あつたのを出して、

「あれの是れのと澤山重ねて着るのは面倒だ。全體の綿を皆一枚に入れてしまつて、それを着てゐたいと思ふ。さうせよ。」

と仰しやつたので、乳母が

「一々解いて、ほごして集めるのも、面倒で御座いますから、新しい綿を厚く作つて差上げませう。」

と申上げると、

「それでは手間どるんだらう。おれは唯だ早くと思ふんだよ。」

と仰しやつたので、何かお考へのあることと思つて、何枚ものを一枚に取り入れて差上げると、それを召して、その夜すぐに出られたのでありました。だから、乳母は、

「その御心算で仰しやつたらうに、何だつて差上げたらう。不斷と違つて、變だとは、どうして氣がつかなかつたらう。悟りのわるい自分の心が怨めしい。」

と云つて、泣き惑うたといひますが、尤もの事ですよ。事しもこそあれ、「さあ〳〵、これを召して」と云つて、御出家の支度をして上げたやうなわけなんですものね。

乳母はこの悲報を聞くとひとしく悶絶して、死人のやうになつてゐました。人々が慰めて、

「これがお耳に入つたら、いとしいと思召す餘り、御道心も亂れませうよ。今更仕方のないこと、のみならず御目出たい事ではありませんか。また佛樣に御なりなら、御自分の御爲めにも結構な事ではないか。それが人間最後の望みといふものさ。」

といふと、乳母は

「和子が佛にならるゝとて、嬉しくはなし、我が身の後世を助けていたゞかうとも思ひはせぬ。唯だ思ふ事は目の前の悲しさばかり。殿樣も北の方樣も、お子達を澤山お持ちだから、構はんさ。天にも地にも和子お一人にかしづいて來た、此のわたし一人の大事なんだよ。」

と云つては、伏しまろんだといひます。ほんとにその通りですわね。佛道心の無い者が後世の

事まで知る筈がありませんよ。以前、お母様の高松殿(明子)の御夢に、顯信君がお頭の左の後を、中途から剃り落されると見られましたが、この事があつて、ハハア是れの前兆であつたなと氣がつかれて、

「すぐに悪い夢を轉じ變へて、御祈りをもすべきであつたに。」

と仰しやつたといふことです。

さて革堂(行願寺)で御髪をおろして、その夜すぐに、比叡に參られましたが(時は寛弘元年の十二月二十一日であつた)その途中、

「加茂の夜風のつめたさは、少し身に沁みる思ひがした。しかしこれからは此の通り、野に臥し山に臥すべき身ぞと觀念して參つたよ。」

と、後に云はれたといふことです。

この君の御出家を疾うから見拔かれたのは今の右衞門ノ督(藤原實成)で、顯信君から、今、中

宮權ノ大夫殿(能信)の北の方になつて居られる、その息女に戀文を贈られた時に、

「あれには出家の相がある。さういふ相のある人を、どうして娘の聟には。」

と云つて、斷つて、後に此の大夫殿(能信)を聟取られたのでありました。またその年(寛弘元年)の正月に、内裏から退出される時に、この右衞門ノ督が傍らの頭ノ中將を顧みて、

「あれ右馬ノ頭が物見の窓から顏をさし出したが、もう出家が迫つてゐる相に見えるわ。幾歳であつたかね?」

と尋ねられると、頭ノ中將が

「左樣、十九になられませう。」

と云はれたので、

「それでは今年か、な!」

と云はれてあつたが、かうと聞かれて、

「それ見たことか。果たして!」

と云はれました。相人でなくても、聰明な人には人相や未來の事が判るものと見えますよ。

入道殿は

「無益しいこと。あんまり歎いて、彼れの心を動かすまい。道心の亂れるのも、あの子の爲めに氣の毒なことである。法師の子供がないので、仕方がない！　まだ幼稚いが、出家させようか、とまで思つたが、皆が不同意するので、見合はせた其の子だ！」

と斯う云はれて、唯だ普通に定められた作法によつて、法師にされたのでありました。受戒の式には入道殿が登山されました。人々が我れも〳〵と爭つて供をされて、實に立派な賑やかな御儀式でしたよ。儀式を司る威儀の僧には優れた高德達を擇ばれました。御先導をば有識僧綱の尊い人達が承つて、一山の役僧、殿の御隨身等が賑やかに人を拂ひ〳〵する、その後から戒壇に登られた時の御容子のすばらしさ！　しかし、それを入道殿は御覽になれませんでしたよ。御自身では多分不本意千萬の事で、傍目も笑止と思はれたのでせう。やがて座主が腰輿に

乘つて、頭上に白蓋をかざさせつゝ登壇されましたが、その時こそ實に天晴れ比叡をうしはく天台座主、戒和尚の隨一とお見えになりましたよ。これは此の世繼が隣家に住む者の、幸ひその儀式に居り合はせて拜觀したのが、物語つて聞かせたそのまゝです。

また是れは通任（濟時の男）の君の物語ですが、

「兄君春宮大夫殿（頼宗）中宮ノ權大夫殿（能信）などが大納言になられた折には、あゝいふ人でも、心を動かされたやうに思はれたが、その人達の新任振舞の折の事や、大納言の新座を新設せられた名譽の光景などをお話ししても、一向心を動かされる樣子もなく、念誦しながら、「そんな事は唯だ一時の……」と、何氣なく言はれたのは、實に見あげた高雅な御心と感服した。」

と、通任の君が云はれたのでありました。

此の殿の御子達は男女を合はせて十二人、それがそッくり缺かさず現存して居られます。凡

そ幸運の人は、男女の子供の官職位階などこそ自由に高められるにしても、その子達の性質人柄まで立派に揃へることは出來ぬでせうが、此の殿の御子達は官位はもとより申分なく、御心ばへ人柄までが、いさゝかも不完全で、人に批難されるといふところがなく、それ〴〵に才學があつて、立派でいらつしやいました。これも他の理由ではない、入道殿の御高運の限りなくいらつしやるその餘德といふものでせう。前々の大臣家にも御子達を數多お持ちのお方が澤山ありましたが、かうも思ふやうに行つた人が一人だつてありましたか。男にも女にも自然善惡が雜つて居られたではありませんか。それを此の北ノ政所達が、お二人ながらかうも揃つて御幸運で、しかもお二人ながら源氏の出でいらつしやるので、これは後世源氏の榮えらるべき兆候だなどとも申すものがあるのです。殿の夫人お二人の消息はまづ右の通り。

但し入道殿は三十歲から關白となられ、一條院、三條院の御代に大政を執つて、思召すまゝに天下を治められましたが、つゞいて今上（後一條天皇）が御卽位遊ばしたので、五十一歲でまた攝政となられました。そして其の年に御自分は太政大臣となつて、攝政をば今の大臣（頼通）に讓らせられましたが、御年五十四歲の寛仁三年八月十八日の夜半から俄に御胸を病ませられました。そしてこれは前々から特別に考へ置かれたのではなく、恐らく病氣の昂奮によられたのでせうが、どういふ思召か、二十一日の未の刻（午後二時）時分に、俄に起き直られて、冠を召され、搔練の赤い下襲に布袴を立派に着けられて、御手を淨められました。「何事か」と、關白殿をはじめ、御子達が皆驚いて居られると、やがて寢殿の西の渡廊に出て、南に向つて、拜をされました。春日の明神に御暇乞を申されたのであります。やがて慶明僧都、定基律師を召して御髮を下させられました。關白殿を始めとして君達殿原いづれも、これはあさましいと驚かれたけれども、突然思ひ立つて、させられる事なので、誰れも〳〵呆れるばかりで、お制めするのことも出來なかつたのです。その淺ましさはとても言語に盡くせません。院源法印が授戒の師を勤められました。着初めには信惠僧都の袈裟衣を用ゐられました。俄の事で御用意が出來なかつたのでせう。御法名を行觀とつけられましたが、後に下の一字を改めて行覺と

されました。

かくして後に、始めて帝、東宮の女御達にも御知らせ上げになつたのです。聞召した御娘君の宮々達の御心の驚き騒ぎは形容も出來ぬばかりでありました。申の刻（午後四時頃）時分に、小一條院が見舞はせられましたが、御門の外で牛を引き離して、御車だけ引き入れて、中門の外で下りて入らせられましたよ。階隱の御車寄で下りさせられなかつた御遠慮のほど、實に恐れ多くもまた御殊勝の御振舞でありました。宮達も夕方になつて御いでになりました。中宮（威子）、皇太后宮（妍子）などは、御同車で御渡りになりました。行啓の御樣子なども、俄の事で、恒例の作法にも依られなかつたのです。同じ年の九月二十七日、奈良で御受戒がありました。かやうな御儀の御執行につけても、結構な事が澤山ありましたけれども、どなたも御存じの事ですから、細かには申しますまい。

三月二十一日に御出家は遊ばしましたが、尙ほ又同じ年の五月八日に准三宮の位にならせら

れて、年官年爵をいたゞかれました。三人の后、關白左大臣、內大臣、幾人もの納言の御父君で、帝、東宮の御祖父君でいらせられます。攝關として世を治められたことが、もう三十一年ばかりにならせられませうか。今年は滿六十歲でいらつしやるから、尙侍の殿の御產の後で、御賀の御祝があるだらうと、世間で言つて居りますよ。またいろ〳〵のお催しがあつて、どんなにか御目出たい事であらうと想像されます。大體世間にまたとない事ですわね、大臣が御女三人を后に並べて見られるといふことは。實に驚くべき稀有の事ですよ。唐土には昔三千人の后が居られたと言ひますけれども、それは家系も調べず、唯だ美貌の評判があるのを隣國まで手を伸べて擇び集めたので、その中には楊貴妃の如く、寵愛が過ぎて悲慘な最期を見たのがあり、王昭君の如く、夷狄の王の求めによつて、遠い胡の國に送られたのがあり、上陽人の如く、十六歲で召されながら、楊貴妃に嫉まれて、帝に見ゆる折を得ず、幾春秋の行き過ぐるも知らずして六十歲まで、うら淋しく過ぐしたといふのもありました。これでは三千人の甲斐のない話でせう。我が國では、七人の后のおはすべき筈ですが、實際は御代々四人を立てられました。

それが、入道殿下の御一門だけから御三方が出られたといふのですから、實に稀有の御幸福と申さねばなりません。尤も皇后ノ宮お一人(三條天皇の后娍子、濟時の女)だけは別系ではありますけれども、それも同じ貞信公(忠平)の御子孫なれば、別に餘所人、他門と視るべきではありますまい。だから世の中すべてが此の入道殿の御光に輝いてゐるところへ、その別系の后が此の春御薨れになつたので、此の三人の后達のみが、更に著しく輝かせられるといふことになつたのです。

この殿が折にふれて遊ばされた詩や和歌などは、白樂天や赤人、人丸、躬恒、貫之でも、かうはとても思ひ寄られまいと思はれますね。春日御拜の行幸は先帝一條院の御代(永祿元年、兼家攝政の時)から始まつたものです。そしてそれが御代々必ずあらせらるべき御恒例となつてゐるので、まだ御幼少ながら、今上も御拜あるべきことに定まつて、御母樣の大宮(彰子)が御輿に御附添になることになりました。「御目出たい」などと云つただけでは、とても盡くせることではありません。天皇樣の御祖父樣で、始終お側にお附添ひ遊ばす入道殿だ、その御容貌が、世間並であつてなるものかとでも思つたものでせう。田舍界隈の民百姓どもが我れも〳〵と寄つて群つて、しかと見屆け奉ると、唯だもう轉輪聖王もかくやとばかり、光り輝くやうにお見えになるので、皆々佛を拜する如く、慌てゝ額に手を當てゝ拜んだといふことです。尤もな事ですわね。大宮樣は赤い色の扇で御顏をさし隱されて、御肩のあたりなどが、唯だわづかに御見えになりました。それほどの御身分にならせられると、一寸の隙間から見える御姿も隱すやうにして、見えはせぬか、どうであらうと心配するのが普通ですが、事にもよるべし、今日は御盛裝の御容子を少しは見せても、何の苦しからう、とでも思はれたのでありませうよ。入道殿も大宮もすつかり好い氣持にならせられたことは、我々にも推量されますわね。

入道殿が大宮に

そのかみや祈りおきけむ春日野の
おなじ道にもたづねゆくかな

‖永祚のむかし父兼家公が、先帝初度の行幸の砌にも、此の同じ道を聖駕に陪しつゝ辿り詣でて、藤原氏の繁榮を祈られたことであらう、その春日野の同じ道を辿つて、うれしや、聖駕に陪しつゝ、うち揃つて祖神の御社へと志して行くとは‖と詠まれると、大宮の御返しは

くもりなき世の光りにや春日野の
おなじ道にもたづね行くらむ

‖仰しやる通り我々はうれしくも、かううち揃つて御祖父君兼家公の同じ道を辿つて祖神に詣でるのですが、これも曇りなき大御代の御光の御蔭で御座いませうよ。‖と、こんな風に詠みかはされました。それが、いかにも御尤もに聞えて、結構に伺ひましたが、その中でも大宮の遊ばした

三笠山さしてぞ來つるいそのかみ
ふるきみゆきの跡をたづねて

‖先帝行幸の御跡をそのまゝたづねて、春日明神の齋かれいます三笠山を遠く望みつゝ志して參つたわけですね‖などは、この老爺などが凡慮のとても及ぶところではありません。遙か上代にも、これほどの秀歌はとてもありますまい。御參拜當日のその日ではあり、春日の御託宣ではないかと思はれますよ。また今日のかやうな榮光があるやうにとて、以前一條院の御代にも大入道殿(兼家)が奏聞して、此の行幸の先例を作られたのではないかと、かうも考へられますね。大體幸運の大成功者が和歌の道に後れて居られるのは、情ない艶消しの心地するものですが、この入道殿は機會ある毎に、必ずかういふ調子の風流を仰しやつて、其の座に興味を添へられたものでした。或る年、北ノ政所(倫子)の六十の賀筵に詠ませられた

ありなれし契りは絶えて今更に
心けがしに千代といふらむ

‖もう私は出家して、長く馴れ〳〵た夫婦の契りは絶えて居るのだが、その心清き佛の御弟子

が、何故今更、折角更生した佛心を汚すやうに「千代の契」などとは云ふのであらう。＝などは、その洒落れた御戯謔が、とても面白いではありませんか。またあの一品ノ宮（禎子、次女姈子中宮所生）の御生れ遊ばした御産養の饗饌を、伯母様の大宮が設けられた夜の御歌は……もう御聞きになつてゐますか？　それは實に面白いんですよ。これはとても凡人の思ひ寄るべき和歌の體ではありませんね。

おと宮のうぶやしなひを姉宮の
　　したまふ見るぞうれしかりける

＝妹の宮のお産祝ひの御馳走を、姉宮が設けられる、そしてその姉妹の二人の宮が、共に中宮として女の位を極めて居られるのを見る、この老の身の嬉しさよ＝とか承つて居りますがね。」

と云つてにこ〳〵して居る。

四條ノ大納言（公任）があの通り萬事に優れて居られるのを、大入道殿（兼家）がけなるがつて、

「どうしてあゝもあるのだらう。羨しい事ではある。我が子供等が彼れの影すらも蹈めぬのかと思ふと、情ない。」

と云はれると、中ノ關白殿（道隆）、粟田殿（道兼）などは、父からさう思はれるのも無理がないと、恥かしさうにして、默つてうづむいて居られたが、この入道殿（道長）は、まだ極く幼い御身で、

「影は踏まないで、面を踏みますわ。踏まずにおくものですか。」

と云はれたといひますよ。ほんとに其の通りに成つていらつしやるではありませんか。大納言どころか、内大臣殿（伊周）にでも、もう近いところで、膝組みなどでは御逢ひになりませんよ。一體、然るべき人は、幼い時分から、膽魂がしつかりして、それに神佛の御加護も特別堅固だと見えますね。

花山院の御代のこと、五月も下旬二十日過ぎの月無き頃になりながら、梅雨はまだ收まら

ず、どう〳〵、ざあ〳〵と、恐ろしく降り頻る大雨の夜でした。帝がお淋しく思召されたのでせう、殿上の間に出御あり、公卿達の仲間入りして、御遊びになつて居られましたが、人々がいろ〳〵の物語をして居る中に、話がいつか昔の恐ろしかつた事などに移つて行くと、帝が

「ムヽ、今夜こそ、丁度今の話のやうな氣味のわるい晩ではないか。この通り人が澤山居てさへ、ぞッとする。まして物離れした所などは、どんなだらう。さういふ所に、誰れか、一人で行けるか。」

と仰しやると、皆が

「とても參れません。」

とばかり言つて居る中に、入道殿が、

「どちらへなりとも參りませう。」

と申されました。一風變はつた、物好みな所の御ありになる帝で、

「それは、とても面白い。では行け。道隆は豐樂院へ、道兼は仁壽殿の塗籠へ、道長は大

極殿へ行け。」

と仰しやつたので、無關係の君達は、「不都合な事を奏聞したものである、えらい事になつた」と思つて居る。また仰せを蒙つた二人の殿達は、顏色が變はつて、困つた事になつたと思つて居られると、入道殿は微塵もさういふ樣子がなく、

「自分の家の子は連れますまい。此の陣の小者なり、瀧口なり、誰れか一人昭慶門まで送れと仰言をいたゞきたう御座ります。それから內へは、一人で入るで御座りませう。」

と申されると、

花山「證據が無くては駄目だらう。」

道長「いかさま！」

と云つて、帝の御手箱に入れて置かせられた小刀を申受けて立たれました。他のお二人も、苦い顏して、しぶ〳〵に出かけられました。

子四つ（約午前一時半頃）と奏する聲を聞いてから、斯う仰せがあつて、彼れ是れする中に、

丑（午前二時）にもなつたであらう。帝は

「道隆は右衞門の陣から出よ。道長は承明門から出て行け。」

と、道筋の御指圖まであつたので、いづれも仰せの通りに行かれる。中ノ關白殿は、陣までは我慢して行かれたが、宴の松原の邊に、何とも得知れぬ聲の聞えるのに、堪らなくなつて、歸られました。粟田殿は露臺の外まで顫へ〳〵行かれたが、仁壽殿の東面の砌のあたりに、簷と脊くらべするやうな巨人が突つ立つて居るやうに見えたので、前後も忘れ、勅命も命あつてこそと引返される。かうして二人とも歸つて來られたので、帝は扇を叩いて「痛快々々！」と云つて笑はせられましたが、いつまで經つても、入道殿の姿が見えないので、どうしたらうと思召していらつしやると、極めて平氣に、どこを風が吹くといふ風で御前に參られました。帝が

「どうした？　どうした？」

と御尋ねなさると、落ちついたもので、拜借した御刀に、何か削り取つたものを取り添へて奉られました。

「何だ、これは？」

と仰しやるので、

「空手で歸りましては、證據があるまいと存じまして、高御座の南面の柱の下のところを削つて持つて參りまして御座いまする。」

と、人々の意表に出て、けろりとして答へられたので、これはえらいとお呆れになりました。見ると、兄君お二人のお顏色はもとのまゝ青ざめて、弟の殿が、かうして歸られたのを、帝を御始め、皆が感心して騷ぎ立てゝゐるのに、羨ましいのか、どういふのか、物も云はずに、聞いて居られた。

帝はまだ疑はしいと思召し、翌朝

「藏人をやつて削り屑を番はして見よ。」

と仰せがあつたので、持つて行つて押附けて見ると、ちつとも違はなかつたと申す。その削つた痕跡は、今もはつきりと殘つてゐると申します。これが宮中名所の一つとなつて、數十年を

經た今日でも、見た人がやはり、えらい事だと驚いて話して聞かせましたよ。

故の女院（圓融天皇の后、一條天皇の御母）の御法事を執行ふため、飯室の權僧正（尋禪）が見えられた折に、その伴僧の中に相人がゐてあつたのを、女房達が取り圍んで、てんでの相を見て貰つたことがあつた。その序に、女房が

「內大臣殿（道隆）は、いかゞでいらつしやいます。」

と尋ねると、

「實に御えらい御相でいらつしやります。天下を取る相がおありですよ。……が、中宮ノ大夫殿（道長）のお相こそ、實におえらういらつしやりますね。」

といふ。今度は粟田殿（道兼）のを尋ねると、

「これも實に御立派でいらつしやいます。」

と云つて、また

「あゝ〳〵、中宮ノ大夫殿こそ、實にすぐれていらつしやりますね。」

といふ。今度は權大納言殿（伊周）のを尋ねると、

「これも大層尊いお相でいらつしやります。雷様の相がいらつしやりますね。」

と云つたので、

「まあ！　雷ッて何の事？」

と問ふと、

「一しきりは、ごろ〳〵と高く鳴るが、後が振はないのですよ。だから御晩節がいかゞいらつしやらうか……と見えますね。……やはり中宮ノ大夫殿こそ、これは實に限りもなく、際もなく、無限無邊際にいらつしやりますよ。」

と、他の人を尋ねる度ごとに、必ず入道殿を引添へては褒めるのであつた。

「どんなお相なので、さう度ごとにお言ひ添へになるのですか。」

と尋ねると、

「されば相書に、相中の第一は「虎子如渡深山峯」と說いてある、それに些とも違はせられぬので、かうは申し上げるのです。此の譬喩は、猛虎があたりを睥睨しつゝ高き奥山の峰わたりをする容子に似てゐるといふのですが、殿の御容貌御風采まづ毘沙門の御威勢を見るのと、そツくりですからね。御相かくの如きによつて、どなたよりも優れていらつしやるとは申しました。」

と答へたと申しますよ。いや、えらい名人の相者ではありませんか。四人の殿が四人ながら、見込のはづれたのがありますか。殊に帥の殿が内大臣までは、トン／＼拍子に成らせられたのを、「初めよし」とは云つたのでせう。しかし雷は勿體ない、雷は落ちても又あがるといふことがあるから、これは星が殞ちて石になるのに譬へる方が本當ですね。殞石！　殞石！　それこそ二度と上りッこがありませんわ。

特別の場合々々に於けるこの殿の御容貌、御態度などは、ほんとにいつまでもの偲び草だと、

皆が申して居りますよ。その中でも、三條院の御代に、賀茂へ行幸のあつた日のこと。雪が殊の外ひどく降つて來たので、御單衣の袖を引き出して扇を高く持たれましたが、眞白に降りかゝつたので、

「是れはひどい！」

と云つて、はた／＼と拂はれました。その御容子は實に風情なものでしたな。上の御衣は黑いでせう。引き出された御單衣は花やかな紅でせう。この二つの色の間に眞白な雪が映發されたのですからね。それは何とも云はれぬ御容子でしたよ。殊に其の折の御乘馬は、名高い何某といふ馬で、手に負へぬ惡馬の悍馬でしたが、見事にそれを乘りしづめられたのですからね。三條院も其の日の事をば、特に思ひ出しなされて、御病中にも、

「賀茂の行幸の日の、あの雪は、とても忘れられんよ。」

と仰せられたといひますが、ほんとに有難いものでしたね。

この通り世の中の光とも仰がれていらつしやる入道殿が、一年ばかりの間、不運つゞきで、ひどく心配されたことがありました。どういふ天道樣の思召であつたのでせうかね。しかしながら、其の間にさへ、少しでも引け目の素振を見せられたことがありますか。官邊の公事や作法だけには、位相應あるべきやうに振舞はれ、場合相應に時を違へず勤められましたが、內所の私人關係に於いては、上位の誰れ彼れに對しても更に遠慮されなかつたではありませんか。例へばです・・・

或日帥殿(伊周)が南院で、人々を集めて、弓を射て遊んで居られると、そこへ此の殿が見えられました。思ひかけぬところへ、變な奴が來たと、兄君の中ノ關白殿が驚かれましたが、煙たいものには慇懃にの譬で、それからいろ〳〵とお愛想をされまして、官位は卑いが先に立てゝ、まづ殿に先きの矢を射させられましたが、一勝負の結果は、帥殿が二本の負となりました。中ノ關白殿が、又周圍に居る取卷の人々も、帥殿に負けさせまいと思つたのでせう、

「もう二遍御延べなさいまし。」

と云つて、到頭延べることにしてしまつたので、入道殿はむツとされて、

「では御延べなさい。」

と云つて、又射させられるとて、先づ誓はれました。

「道長が家から、帝、后が立たせらるべきものならば、此の矢よ中たれ！」

と、云ふと同時に放たれると、ぱッつりです。同じ中たるにしても、かう眞中に中たるといふことが、あるものでせうか。次ぎに帥殿が射られると、これはすつかり氣おくれして、御手もぶる〳〵された結果、的の近所にも寄らず、あらぬ虛空を射られたので、見てゐる父の關白殿の御顏が眞靑になられました。やがて入道殿が又射らるゝとて、今度は、

「道長攝政關白すべきものならば、此の矢よ當たれ！」

と第二の呪詛を放つて、さて射られると、初めと同じ樣に、的の割るゝばかり眞中を射拔かれました。今までちやほやと愛想をされた興味も醒めて、苦々しい氣分になる。父の大臣は、弓を取つて立たれた帥殿に、

「なぜに射る。止せ〳〵。」

と制されて、一座がすつかり白けわたりました。入道殿は矢を返して、やがて悠々と立ち出でられました。

これは殿が左京ノ大夫といはれた時のことです。殿は弓を巧みに射られました。またひどく好まれました。一體競射の勝負などはよくある事で、別に珍しい事ではないが、一方の威風に打たれ、また言ひ出さるゝ事の炙所を突いた奇拔さに氣を呑まれて、一方が臆せられたといふのでせう。

また故の女院(詮子)が石山詣をされた折に、入道殿は御馬で、帥殿は御車で御供されましたが、帥殿は俄の故障で粟田口から歸られるとて、女院の御車のもとに伺つて御挨拶をされました。院の御車が停まつたので、その御轅を抑へて立つて居られると、そこへ先に立つた入道殿が御馬を引き返して來て、帥殿の頸筋のもとに、近々と立ち寄られて、

「早う致せ。日が暮れるに。」

と云はれました。不思議に思つて振返られたが、入道殿は驚かれた御樣子もなく、また早速退かうともされず、

「日が暮れたよ。早く疾く。」

と急き立てられました。(殿は大納言、そして甥の帥殿が內大臣の時である。)帥殿はひどく憤られたが、憤つたとてどうされるものですか。到頭默つておとなしく立ち退かれました。そして歸つて父の大臣に訴へられると、

「大臣を馬鹿にするやうな者に、ろくな事があるものか。」

と云はれたといふことです。

三月上巳の日のこと、御祓が濟んでから、序に水邊の逍遙を樂しまうとて、帥殿が然るべき人々を數多連れて鴨の川原に出かけられました。日おほひの平張を澤山張り渡した休息所が用

意されて、入道殿も其處に行かれましたが、乘られた御車を幕に間近い處まで進めたので、殿が、

「ひどい事をするな。いかんよ。退けさせい。」

と制されると、某丸と云つた御車副が、

「扨々、何を言つて入らつしやるんだらう。そんな事を言つて入らつしやるから、内の殿樣は、御運が開けないんだ。あゝ〳〵災難、災難！」

と言ひつゝ、牛を强く打つて、わざと、更に近く平張のもとに寄せさせました。殿は

「此の男には、散々にこき卸されたよ。」

と云はれたが、さて此の車副をばひどくお氣に入つて、目を懸けられましたので、こんな事が種になつて、この殿達の御仲が大層わるくなられたのでありました。

女院（詮子、一條天皇の母后、道長の妹）は入道殿をば特別に敬愛して居られたので、帥殿は女

院をばとかく餘所々々しくあしらはれました。そこへまた帝（一條天皇）が皇后ノ宮（定子）を非常に御寵愛遊ばさるゝ關係から、帥殿は夜晝御前に伺候して、入道の事は言ふまでもなく、御母后の女院の御事まで、何かあると惡しざまに言はれるのを、女院も自然感づかせられたのでせう、帥殿の入知惠で母子の間を裂かれることを、ひどく不本意の事に思召されたのでありました。御尤もの事ですわね。

かくして入道殿が關白となられる事について、帝が容易にウムと仰しやらないのでありました。そこへ皇后ノ宮（定子）もまた父大臣（道隆）が亡くなられて、權勢の他門に移ることをば、ひどく困つた事に思召されましてね…だから、以前に粟田殿（道兼）にだツて、早速は關白の宣旨が下らなかつたではありませんか。こんな事情はあつたが、しかしながら女院は、長幼の順序、人物の勝劣、天下の爲めと、いろ〳〵道理のまゝの事を思召され、一方また帥殿の事を不快に思召されたので、帝が入道殿關白の事を、ひどくお澁りになつたけれども、

「どうして、さうは思召されるのです。以前伊周に大臣の先を越されたことさへ、實に氣

の毒でありましたのに、……しかし、それは父大臣(道隆)が、その權力で强ひられたことだから、否とも仰しやられなかつたのでせう。已に一旦粟田の大臣に關白をお許し遊ばしたのに、今度道長にお許し遊ばさないといふのは、道長の爲めに可哀相、といふよりは、寧ろ君の御爲めにならぬ事であり、また世間でも不都合のやうに言ひ做しませうぞ。」

などと、强意見を遊ばしたので、うるさく思召されたのでせう、その後はお母樣女院の御面前を避けさせられるやうになりました。そこで女院は清涼殿の上ノ御局にお上りなされて、不斷の如く帝の御出でをば願はせられず、御自身帝の御入りになつた夜ノ御殿に御入りになつて、泣く泣く御諫言を遊ばされました。

その日、入道殿は、參內して、上ノ御局で吉左右を御待ちになりました。待てども〳〵女院が出て入らつしやらないので、これはとても駄目かと、胸がつぶれて居られると、暫らくして、戸を押開けて出でさせられた女院の御顏！　御目のあたりは涙に濡れて赤く光りながら、御口は快げににこ〳〵されて、

「危ないところを……うれしや、宣旨が下りましたぞ。」

と仰しやつたといひますよ。ほんの一寸した事でも、凡て過去世の應報によつて定まるのでありますから、況んや關白一の人の決定といふが如き大事件は、人お一人の思召次第で定まるのではありますまいが、しかしながら入道殿が、どうして此の殊勳の女院を粗略に思召すことがありませう。その後のいろ〳〵な御恩報じの中で、道理以上に哀れと思はれましたのは、御葬送の折に、御骨までを御首に懸けさせられたことでありましたよ。

ほんとに中ノ關白殿(道隆)、粟田殿(道兼)と、七八日の中に打ちつゞき亡くなられて、入道殿に天下の移つた時は、人心恟々で、どうなる事かと胸のつぶれる思ひのしたことでありました。極々上代の事は存じませんが、この老爺が物心おぼえてからは、こんな際どい危ない事がありませんからね。近代となつては、一の人の貞信公(忠平)、小野ノ宮殿(實賴)を除外し奉つては、關白として十年つゞかせらるゝといふ事が、近頃では無いのですから、この入道殿もいかゞか

と、いろ〳〵御案じ申して居ると、それどころか、あの上上吉の大高運に壓迫されて、御兄君お二人が、手もなく片端から亡くなられたといふわけでせう。それも亦天命然るべくして然あつた事であるのを、世間は皆そんなものさと、尋常の事のやうに人々が思召すかも知れぬので、昔からの實狀をありのまゝに、また少しお話したいと思ふのです。

この世の中の帝樣、神代七代は申すに及ばず、神武天皇から段々かぞへ奉つて三十七代に當たらせられる孝德天皇の御代に、始めてさま〴〵の大臣が定まられたのです。その時、特に中臣の鎌足の連と申す御方が始めて內大臣になられました。此の大臣は常陸の國で生れられたので・・・。三十九代に當たらるゝ帝を天智天皇と申す。その帝の御時にこそ、此の鎌足の大臣の御姓が藤原と改まりました。それで、藤氏の始祖を內大臣鎌足の大臣としてあるのですが、その御子孫から、あまたの帝、后、大臣、公卿、さま〴〵の御方が生れ出でられました。

こゝに一つ大切なお話がある。此の鎌足の大臣を、天智天皇が恐れ多くも特に御寵愛遊ばして、その女御お一人を此の大臣にお讓り與へになりました。折しも其の女御が御懷姙中であつたので、帝の思召されたには、此の孕んだ子が男ならばあの大臣の子にしよう、若し女ならば朕が子としようと、かう御考へ遊ばして、さて大臣に向つて、

「男ならば大臣の子とするがよい。もし女ならば朕の子にするであらう。」

と御約束なすつたところが、御男子であつたので、內大臣の御子とされました。

この大臣は、その前に、男一人、女一人の御子を持つて居られました。そこへ又この女御のお腹に、引つゞいて女二人、男二人がお生れになりました。その姫君は・・・天智天皇の皇子で大友の皇子と申上げたのが太政大臣にならせられ、やがて同じ年の中に帝位に卽かせられて天武天皇と申上げましたね、・・・その帝の女御で、御姉妹ども引きつゞき入內されて、后となつて居られました。大臣の元の太郎君をば中臣ノ意美麻呂と云つて、宰相まで上られました。女御の夫人が皇胤を孕まれたのは、藤原不比等の大臣と云つて、左大臣まで成り上られましたが、亡くなられて後に贈太政大臣となられました。鎌足の大臣の三郎は宇合と云はれました。四郎

は麻呂と云はれました。この男君だちは皆宰相ぐらゐまでになられたと存じます。かくして鎌足の大臣は、天智天皇の御代で、藤原の姓を賜はられた年に亡くなられました。内大臣の位で二十五年居られたわけです。太政大臣にはなられませんが、藤原氏成立のそも〳〵の御祖先といふ事の尊さによつて、亡くなられた後の諱を淡海公と申しました。

と言ふと、繁樹が遮つていふには、

「大織冠をば、どうして淡海公とは仰しやるのです。大織冠は大臣の位に居らるゝこと二十五年、五十六歳で御薨れになりましたよ。主翁の辯説は天の川をかき流すやうに滔々として、實に面白いが、折々かういふ間違がまじりますね。しかし、誰れだつて、斯う面白く話せるもんではありません。先づ釋尊在世當時の維摩淨名居士かと思はれますな。」

といふと、世繼がいふ。

「むかし唐土に孔子といふ物識があつて、言はれましたよ。智者でも、千度考へる中には、必ず一つは間違ふッてね。その位だもの。世繼はもう百歳を遙かに過ぎて、二百歳には少し足らぬといふ位でありながら、問はれもせぬに全く宙で、此の位しやべるのだから、昔の人にもまづ餘り劣るまいと思ひますよ。」

といふと、繁樹、

「左様々々！　誠にはや言語道斷、興味津々、面白さと云つたら、ありませんよ。」

と言つて、言ひつゝ同時に涙を拭ふ様子など、その感じ方はとても一通りでない。まことに言句に盡くされぬ面白味である。

「鎌足の大臣の御子なる左大臣不比等の大臣は、實は天智天皇の皇子が鎌足の大臣の二郎となられたのです。それで、不比等の大臣は、御名の文字を始めて普通平凡ではありません。それは「ならびひとしからず」といふ意味を見せたのだと言ひますからね。この不比等の大臣の御男子が二人居られました。太郎は武智麿と申して、左大臣にまでなられました。二郎は房前と云つて宰相にまでなられました。この不比等の大臣の御女が二人居られました。お一人は聖武

天皇の御母后で、皇太夫人と申しました。もうお一方は聖武天皇の御后で、光明皇后と申上げました。この皇后の御生みになりました女親王を、聖武天皇が女帝にお据ゑ遊ばしたのです。この女帝をば高野の女帝と申上げて、二度帝位（孝謙天皇、稱德天皇）に卽かせられました。

さて不比等の大臣の御男子四人を四家と名づけて、それ〴〵に家門を分けられました。その太郎の左大臣武智麿をば南家と名づけ、二郎の房前をば北家と名づけ、同母の御兄弟なる宇合の式部卿をば式家と名づけ、その弟の麻呂をば、京家と名づけられました。それを藤原の四家とは申すのです。此の四筋の家から、樣々の國王や、大臣や、公卿が澤山出られて、榮えて居られます。しかしながら、その中で北家の御末が特に榮えて枝が廣がつて居られます。で、この北家の御血統を、改めて引き離して申述べませう。絶えてゐる方の御系統は申しますまい。人とも思はれぬ、存在をも認められぬ程度の者どもは、自然その方の御子孫でもありませうよ。

扨この鎌足の大臣からの御系統が、今の關白殿（頼道）までで、十三代になられませうか。そ

の順序次第をお聞きなさい。藤氏と申せば、唯だ藤原氏の事をいふのだと位に考へられる人もありませう。しかしながら、其の本末を知り明らめる事は、なか〳〵むづかしいことですからね。

一。內大臣鎌足の大臣。藤原姓を賜はられた年の十月十六日に亡くなられました、御年五十六。大臣の位に居らるゝこと二十五年。この姓が新に出來ることを聞いて、紀氏の人が、

「藤に絡まかれた木は枯れてしまふもの、紀氏は今に衰へるぞ。」

と云はれたといふが、ほんとに其の通りらしいやうですね。この鎌足の大臣が病に罹られた時に……當時は佛法がまだ此の國に廣まらず、從つて僧侶なども容易に賴まれなかつたのでせう。それは無理もない話で、聖德太子がお傳へになつて以來、もう大分年を經て、生れたての乳子さへ法華經を讀む位に流布した今日でも、まだ御經を讀まぬものも居りますからね……それで百濟國から渡つて來てゐた尼を呼んで、維摩經を供養させられたが、御氣分が一度は快くなら

れたので、それから此の經がえらく尊いものと思はれるやうになつて、その緣で維摩會は始まつたのでありました。

一。鎌足の大臣の御次男左大臣正一位不比等の大臣。御年六十二歲で、養老四年八月三日に亡くなられました。大臣の位に居らるゝこと十三年、贈太政大臣になられました。元明天皇、元正天皇の御二代かけて、大臣で居られました。

一。不比等の大臣の御次郎房前の大臣。宰相で二十年、大炊の天皇（淳仁天皇）の御代、天平寶字四年八月七日、贈太政大臣になられました。元正天皇、聖武天皇御二代の間宰相として、天平九年四月十七日に亡くなられました。

一。房前の大臣の四男眞楯の大納言。稱德天皇の御代、天平神護二年三月十六日に亡くなられました、御年五十二。公卿で居られたこと七年。

一。眞楯の大納言の御次郎右大臣從二位左近衞ノ大將內麻呂の大臣。御年五十七。公卿で二十年、大臣の位で七年。贈從一位左大臣。桓武天皇、平城天皇の御二代に逢はれました。

一。內麻呂の大臣の御三郎冬嗣の大臣は、右大臣まで昇られ、後には贈太政大臣となられました。この殿以後は、已に次第を逐うて委しく述べてありますから、改めて細かには申しますまい。大體、鎌足の御時代から一度榮え廣がつた御子孫が、段々衰へられて、この冬嗣の大臣の時分には、非常に心細いものになられました。同時に時を得たのは源氏で、その氏の人々ばかりが樣々の大臣や公卿になつて居られました。冬嗣の大臣は之れを見て興福寺の境內に南圓堂を建てゝ、一丈六尺の不空羂索觀音を安置され、つゞいて不空羂索經一千卷を供養されました。その御經は今に傳はつて、藤原氏の人々が、それを取り分けては御護符にして居られます。かく供養された佛像や經文の功德なのでせう、藤原氏が再び榮えて、その御子孫が連綿不斷に今以て帝王の御後見をして居られるのは。また其の御供養の日ですよ、他姓の上達部があまた亡くなられたのは。事實かどうか、世間ではとにかくさう申して居ります。

一。冬嗣大臣の太郎長良の中納言は贈太政大臣までになられました。

一。長良ノ大臣の御三郎基經ノ大臣は太政大臣までになられました。
一。基經ノ大臣の御四郎忠平ノ大臣は太政大臣までになられました。
一。忠平ノ大臣の御次郎師輔ノ大臣は右大臣までになられました。
一。師輔ノ大臣の御三郎兼家ノ大臣は太政大臣まで。
一。兼家ノ大臣の御五郎道長ノ大臣は太政大臣まで。
一。道長ノ大臣の御太郎は、只今の關白左大臣頼通ノ大臣、あのお方で入らせられます。この殿に御子の居られぬのは實に殘念なでしたが、近頃若君のお生れになつたのはお目出たい事でした。母の事は言はぬのを例にして居りますが、これは大層高貴の身で入らつしやるので、特に言ふのです。母君の父なる故左兵衛ノ督(憲定)は、自分の御身こそ世間から尊ばれる程でなかつたが、村上天皇の御孫、爲平親王の御子で、貴人で入らつしやつた、その上にまた此の通り世間にもて騒がるゝ御孫君の生れられたのは、亡き後ながら御目出たい事でした。お七夜の産養を入道がなされましたが、その時贈られた歌は

年をへて待ちつる松の若枝に
うれしくあへる春のみどり子

‖永い年月早く生れよと待ちに待つた嬰兒の孫が、老松自分の若枝ともいふべき子に生れるのに出逢つた此の春のうれしさよ‖といふのでした。帝、東宮を除き奉つては、この子こそ我が孫の長なれとて、長君と名づけられました。

四家の君達が昔から今にかけて數多居らるゝ中にあつて、北家に勝れた人物の連綿と出でつづかれた様子は、以上の通りであります。

鎌足の大臣は、その御生國が常陸であつたので、彼國の鹿島といふ所に、氏の祖神の鎮座を願はれました。その御時から今に至るまで、新しい帝王、皇后、大臣の立たるゝ折には、必ず奉幣使が立つことになつて居ります。その後帝が奈良にあらせらるゝやうになつて、鹿島は遠

いからとて、大和國三笠山に神輿の移御を願はせられ、これを春日明神と名づけ奉られました。これが今に藤原氏の御氏神となつて、朝廷からは近衛ノ使、内侍ノ使といふ男女の御使を立てさせられ、后ノ宮や藤氏の大臣公卿達が皆此の明神に奉仕して、二月及び十一月の上の申の日の御祭には、諸方面からの御使が立つて、大騒ぎして賑ひます。帝が此の京都に遷らせられて後は又更に近く神輿を迎へさせられて、その御鎭座所を大原野と申します。此の御社では御祭禮を二月の初卯の日、及び十一月の初子の日と定めて、一年二回の御賑はひがあります。こゝにも同じく勅使が立ち、藤原氏の殿達は皆この神に十列の御幣を奉られます。その中に、尙ほも近くといふので、また御輿を振り奉つて、吉田に鎭座あらせられました。あの吉田明神は山蔭の中納言が御分社を願はれたものですよ。そして四月の下の子の日と十一月の下の申の日、この兩日を祭禮と定めて、我が一族から帝、后ノ宮が立たせられるならば、朝儀の公祭に願ひまするとと誓はれて、その願の叶つた一條院の御時から、公儀のお祭にはなつたのです。

また鎌足の大臣の御氏寺をば大和國多武峰に造らせられ、そこに御骨を納められて、今に三昧供養を絶やされません。又不比等の大臣は山階寺（興福寺）を建立されました。それから、此の山階寺に於いて、常に藤原氏の隆運を祈られるのですが、若し此の寺及び多武ノ峰、春日、大原野、吉田、それ〴〵の寺社に於いて、異例の怪しき徵候が現はれると、御寺の僧侶、神社の禰宜が公儀に奏聞し、その上で、氏の長者が陰陽師に占はせて、その結果、謹慎すべき者があれば、その不吉な年廻りに當たられる殿原のもとへ、物忌謹慎の次第を書いて、關白家から配られます。一體、此の山階寺に行はれたのが起こりで、年に二三年はあちこちで大きな法會が行はれますよ。まづ正月八日から十四日までは八省院で奈良方の僧を講師として御齋會が行はれ、至尊を始め奉り、藤原氏の殿原が皆その供養にあづかられます。次ぎには三月七日に始まつて十三日まで、藥師寺で最勝會が七日間。それから山階寺で、十月十日から維摩會が七日間。これらの度毎に勅使が下向して、會にあづかる僧達に、祿として衾を下さるのです。藤原氏の殿原から、五位までは此の供養にあづかられます。南都の法師は、三度講師を勤めると、已講の

稱を許され、それから段々に律師、僧綱と、位が上つて行くのです。かやうの次第で、此の御寺は實に嚴めしく尊いところです。非道極まつた事でもこの寺に關係があれば、誰れもとやかく申しません。そして「山階道理」と名づけて、そッとして置くのです。

以上の通りで、藤原氏の御榮えは實に結構無類といふわけです。で、同じ事の樣ではあるが、また前のつゞきを申述べませう。そして今度は皇后の御父君、帝の御祖父君となられた方面の事情を實證いたしませう。

一。內大臣鎌足の御女お二人、これはお二人とも天武天皇に奉られました。その御腹に男女の御子達は居られましたが、その中から帝や東宮はお立ちになりませんでした。

一。贈太政大臣不比等の御女お二人、そのお一人は文武天皇の女御となられて、そのお腹に皇子が御生れになりました。これを聖武天皇と申上げます。御母をは宮子娘と申しました。もう一人の御女をば、御甥の聖武天皇に奉られ、それがやがて后に立たれました。これを光明皇后と申上げました。そのお腹に、女御子のお生れになつたのを、女帝に御立て申上げられたの

であります。高野の女帝（孝謙天皇）と申上げるのがそれで、第四十六代にあたらせられました。それが一度御退位あつて後、帝御一人を隔てゝ、再び御四十八代（稱德天皇）として御重祚遊ばされました。また聖武天皇の御母后を太皇后ノ宮と申します。されば不比等の大臣の御女はお二人とも后で入らつしやいました。從つて不比等の大臣は太皇后宮及び光明皇后の御父君、聖武天皇並びに高野ノ女帝の御祖父君といふことになります。

一。贈太政大臣冬嗣の大臣は、皇太后、順子の御父、文德天皇の御祖父。

一。太政大臣良房のおとゞは、皇太后明子の御父、清和天皇の御祖父。

一。贈太政大臣長良のおとゞは、皇太后ノ宮高子の御父、陽成天皇の御祖父。

一。贈太臣總繼のおとゞは、贈皇太后ノ宮澤子の父、光孝天皇の御祖父。

一。內大臣高藤のおとゞは、皇太后ノ宮胤子の御父。醍醐天皇の御祖父。

一。太政大臣基經のおとゞは、皇后ノ宮穩子の御父、朱雀、村上二代の御祖父。

一。右大臣師輔のおとゞは、皇后ノ宮安子の御父、冷泉院並びに圓融院の御祖父。

一。太政大臣伊尹の大臣は、贈皇后ノ宮懐子の御父、花山院の御祖父。

一。太政大臣兼家のおとゞは、皇太后ノ宮詮子並びに贈皇后ノ宮超子の御父、一條院並びに三條院の御祖父。

一。太政大臣道長のおとゞは太皇太后ノ宮彰子、皇后ノ宮妍子、中宮威子、東宮の御息所嬉子の御父、今上（後一條天皇）並びに東宮（後朱雀）の御祖父に入らせられます。藤氏御代々澤山の御大身方の中で、我が娘の皇后を三人まで据ゑ並べて見奉られるといふ事は、この入道殿より外にはあらせられますまい。その上に、入道殿は關白左大臣（頼通）、内大臣（教通）、大納言二人（頼宗、能信）、中納言（長家）の御親で入らせられます。さうでせう、ようく聞き集めて比較して御覽なさい。日本國には先づ唯一無二で入らつしやりますよ。

御當人もお偉い、御子孫もお偉く入らつしやるが、その上にお偉いのは、作らせられた御堂の有様です。御堂、寺院では、鎌足ノ大臣の多武ノ峰、不比等ノ大臣の山階寺、基經ノ大臣の極樂

寺、忠平ノ大臣の法性寺、九條殿の楞嚴院、それから恐れ多い事ながら天の帝聖武天皇の御造營になりました東大寺、これも、佛だけは五丈三尺五寸の、すばらしく大きくは入らつしやるらしいが、やはり彼の入道殿の無量壽院には並べられません。況んや餘の寺々に於いてをやです。元來大和の大安寺は……都率天の院の一つを、天笠の祇園精舍にうつして造りました。その天笠の祇園精舍を唐土の西明寺にうつくして造り、その又唐土の西明寺を、我が國の帝は、大安寺にうつさせられたのであります。しかしながら、其の時こそあれ、今迄こそ無比なりけれ、只今ではやはり此の無量壽院が優つて居られます。南都にある若干の大寺も、とても此の寺には當たれません。恒德公（爲光）の法住寺、とても剛儀なものですが、やはり此の無量新院がすぐれて居られます。難波の天王寺、これは聖德太子が魂を込めて造らせられたものではあるが、やつぱり此の無量壽院が優れて居ります。奈良は寺の都、七大寺の、十五大寺のといひますが、一々比較して見ると、やッぱり此の無量壽院が、實に立派で結構で、まづ極樂淨土が此の世に現じたのではないかと見えますよ。かうして見ると、此の無量壽院も、必ず、入道殿

に特別の御考があり、御願があつて、造らせられたのに相違ありますまい。

もう一つ、入道殿の建立された淨明寺は、東三條の大臣(兼家)が大臣になられて、その悦びの御報告に木幡なる藤氏御代々の御墓所に詣でられたことがありました。その時のお供にまだ子供の入道殿を伴はれましたが、子供心にも御覽になつて、御先祖達のお骨が澤山葬つてあるのに、鐘の聲一つ聞かぬといふのは、甚だ情ないことである。

「自分が思ふやうになつたら、こゝに一つ、三昧堂を建てるであらう。」

と、御心のうちに思召して企てられました、それが此の淨明寺だと承つて居ります。

かういふ事は、昔も澤山ありましたが、その中でも、極樂寺、法性寺の緣起には、特別に感心させられます。御年を召した大人でも、かういふ事を思ひつくのは、容易でないと思ひますのに、この御寺が二つながら、殿原が御幼少の時の一念御發起によつたのですからね。帝様の

御代はいつと確かには承りませんが、何でも深草、仁明天皇の御時代ごろかと想像されます。芹川への行幸がありました時に、昭宣公(基經)が、まだ十二三歳の童殿上人てお供をされました。その時帝は琴を遊ばされました。例の琴を彈くには別の爪を作つて、指にはめて彈くのです。帝も其の琴爪を持たせられましたが、落させられまして、これは一大事と思召しましたけれども、俄に新しく作らせられることも出來ず、それに何か然るべき因緣があつて思召し寄つたものでせう、歷とした大人の方々には仰付けられずして、擇りに擇つて幼少の此の君に、

「お前、さがして來い。」

と仰せられました。承つて、お馬をかへして行かれましたが、何處をあてに、どうして尋ね出されることが出來ませう。けれども、見つけて差上げ得ぬといふ事をば、たまらなくつらい事に思はれたので、

「この爪を見つけ得たところに、伽藍を建てよう。」

と、願を立て、「伽藍を、」「伽藍を」と、一心こめて搜されると、ふッと目につきました、そこ

ですよ、あの極樂寺の建ちおはしますは！　子供心にどうしてかうは思ひつかれたのでせうかこれも然るべき約束事で、御爪も落ちたのでせう、又幼少の此の君を擇んで御命じになつたのでもありませうよ。

さて昭宣公がいよ〳〵尊い御身分にならせられて、宿願なる御堂建立の御指圖に入らつしやる、其の御車に、まだ極御ちひさい貞信公(忠平)を連れられましたが、今の法性寺の前の所にさしかゝられると、突然父御に

「こゝの方が御堂に適當でせう。こゝになさいましよ。」

と云はれました。不思議な事をいふ、何が目に留まつたのかと、車を降りて御覽になると、成程非常によく見えるので、子供の眼で、どうしてかうも見たのであらう、これは何か然るべき因緣があるのであらうと思召して、

「ほんとに好い所だな。こゝにはお前の堂を建てるがよい。父はかう〳〵いふ事があつたので、そこに建てるぞ。」

と云はれました。そこで法性寺がこゝに建つたのです。」

と云ふと、繁樹が尋ねた。

「では九條殿の飯室(楞嚴院)などは、どうです？　何かえらい緣起がありますか。殿が横川の大僧正(慈惠)の御房への御參りには、この繁樹もよくお供したものでしたがね。」

「其の樣な事についても、いろ〳〵見聞した事はありますが、やはり入道殿が群を拔いて、すぐれて居られますなあ。

まづ、天地神明に受けられて入らつしやるのは、此の入道殿ですからね。何か行はせられるといふ折には、恐ろしい大風が吹き、長雨が降つてゐても、その二三日前には、ちやんと空が晴れて、土が乾きます。だからこそ、或は聖德太子の御再誕と申し、或は弘法大師が佛法興隆の爲めに生れかはらせられたのだともいふのでせう。ほんとに老爺どもが僻目にも、只人とは

お見えになりませんよ。あれはやはり神佛が假りに人間の姿を取られた權者で入らつしやるのだらう、とねい、さう思つて拜んで居るのです。だから入道殿の治められる、此の世の中の樂しさッて、ありませんわ。何故と仰しやい。昔は殿達、宮達、男女のお歴々達にに仕へる馬飼牛飼等が、いや何佛の御靈會の料だ、何社の御祭禮の料だと云つては、錢、紙、米をはたり絞つて、野山の草木をさへ、此方等には刈らせなかつたではありませか。それが今では、仕丁小者が自分の食物を持つて來るやうになつて、人の物を奪ひ取るといふ事がなくなりました。また里の役人、村の肝煎などが出かけて來て、火祭や何やと云つて、うるさく責めはたる事も今は聞こえません。こんな泰平無事の結構な御時世にも逢へるものかと思ひますよ。この爺どもが卑しい家でも、帶紐といて門をも締めず、何の心配もなく伸び〳〵と寢て居られるから、お蔭で若々しくなり、長生も出來たといふわけです。第一、北野や加茂の河原邊に作つた小豆、大角豆、瓜、茄子のたぐひ、中頃までは、實にやり切れなかつたものでしたがね。それが近年はすつかり樂なものになりましたよ。人の取らぬなどは言ふに及ばず、馬も牛も食ひません

わ。だから唯だ打ッちやつて置くといふわけです。難有くもよく、こんな結構な彌勒樣の世に生れあはせたものですね。」

といふらしい。すると、もう一人の翁が、

「だが、昨日今日、あの御堂御普請の人夫を頻りに徵發されるのが堪らないと言ふ人があるらしいが、さうはお聞きになりませんか。」

世繼　さやう〳〵。それは有る、〳〵。二三日おきに召すわ。しかしそれは行つても損にはならん。その理由は、極樂淨土を新規に出現させる爲めに召すのだと、かう思へば、身に叶ふ以上、どうして參加せずに居られませう。わたしなどは、將來あの御堂の草木になりたいものだと思ひますよ。だから、わけの解る人は、望んでも參るべきです。だから爺等は又とない機會だと思つて、一度も缺かさず奉仕して居ります。そして參つて見ると、惡い事は更に無し、御飯お酒は度々下さる、進上物の果物までも惠んで下さる、始終奉仕する者には、衣類の御手當までがありますわ。だからやつて來る下人共も、自ら進んで集まつて來ては、いそ〳〵と働くとい